俳諧七部集　上

へ 5
1844
1

1844
1

さい行はその人ゆかりある子周並の郎ふ行
あふせしる聞へ給ひれへさる行りてあまたゝへ
めりとてもちはかれかんはみとりいられたれ給へ
有き紙筆ふれ度く世ふかて作くさる紙行のまく
みしらく此紙数つる人の枕草紙ゟしたかひの
みつうそのまゝくさんそれいたそやさしく好みそへ
くさかめ紙をかく諸行冊子と殊して風かそのさ
さふ旅る乃中ささる趣んとたそのましをさへ
そしめふ其しひてんやといふそのれ紙魚てふ
虫乃すくせありてふるあてぬとのへとも いやまさ
なひかんの給ふのさくれひとしれたてさるひとりなふよる

の蔵紙さへうれまへされたみさりまとをさんとん
筆いたとおるは関をかり玄ふしあらさめたを
ひとすしにいふ乃さて京いまをさりてハかく
博士めれを幸関つんむり蕭約そ五経紙
まくのかしらよ書てあさひの気まゝ總ないまま子周
八十郎と経つゝ乃作るふきたて源は勝まぜん
とれ七絃そ清鸞の七経ともいたんさ唐倭なの
さらんかたると云ても千んは同しうまへしそんたく
様あまちりなあそく風月婦さんとたちみよまなふ

聾者水母散人呉竹のよみやれ田書れ
志るされ

春乃日

暖の気に人くし吟きちせて御田のかるみにけらしぬ
淀し舟さいかうしくなりゆく比柴松乃かもゝ入りて
いそのくちなり重五か桜折らけり竹墻折くちらさに
まちうちのかさき乃家しまと折かひ出るる

二月十八日

春めくや人さまゞの伊勢参　荷兮
桜ちる中馬ながく連　重五
山かすむ月一時に館立て　雨桐
縫なうしれおくらに茶をつむ　李風
志賀風なよくし雲ハ鷗多く　昌圭

ウ

くもりは沖の岩くらくなりて　執筆
須广寺に汗の帷子脱かへん　重五
をかしげなるしく笛を截く　荷兮
文王の鷹かしこまり人を去はなで　李風
雨の降日は角のなきゝ草　雨桐
執こゝろ一夜ハ骨を抱べく世に　荷兮
傾城乳をかくして晨明　昌圭
霧くらし人の新婚つゝ　雨桐
わやくとて乃し神楽の里　重五
鳥居よりまれ奥の桁行く　昌圭
花見は出る男乃脈鳶ありくさに　李風
柳より続ぞちくらに鞭に乗まや　重五

入かゝる日もほし〳〵蝶いそがしくなり　荷兮
ミ川ゐたしき寒ミ家ゝ連歌して　李風
うかれ憶之 棒きし かね　雨桐
廷鷲をたゝむる所を切狩　荷兮
いとふるうし こゝき 五位の針立　昌圭
松の木に宮司の門をかくて　雨桐
ちらし文絃もつくれ所内ぞ　重五
秋朗豆腐を蒸によし建けり　昌圭
念佛ゝさぬきれ秋あはれ也　李風
穂蓼生ふ蔵を住家の隠居で　重五
家各を橋の名によする月　荷兮
傘の内たれかの晒の皆小　李風

秋後お家く出家ありくし　雨桐
あらしぎれ雨行なる女よまん　荷兮
綴額ひとりを二人していきを　昌圭
世をあはぬ居滑に年とりて　雨桐
紀念にもらし小瓶の首畑　重五
いく春を花と竹にはいそがしく　昌圭
赤も見も香をりに伸く　李風

三月六日野水亭にて

なら坂や畑うつ山の八重さくら　旦藁
おりしらふうきむらさきの蘊　野水
春の旅笠仮寝にあふ人繕えて　荷兮

口きゝく人も清らなりけり　越人

松風にたをれぬ程の浪の磯　羽笠

夏のちらしに虫を啼く月　執筆

ウ

笠白き太秦祭過にけり　野水

菊ある家坂によめ子をそく　且藁

表町由緒のまゝに二人髪剃ん　越人

暁いかにし車ゆくまし　荷兮

鱈負ふて大津の浜に入にけり　且藁

何やらゆかし家に玉乃声　越人

篠薮あるはえりを敷やりて　羽笠

萩あつかふた夏日のそら　[illegible]

里人に薦を施す妹乃亥　越人

月かすむ浪に重石をとく樽　羽笠

さくら咲木乃根も花の鮎もらん　[illegible]

洞尋ぬ春の温泉の山　且藁

のとかさや銚港乃残る笑　越人

内侍の乞しぬ代りの眉乃図　荷兮

物かりに軍の中へ八拝りきに　羽笠

名もからぬ栗くらやしよし　野水

大年に念仏する恵義次棚　且藁

年走ぬ御無事ほよし隠や　越人

蛸のみの家の魚の掬把らく　荷兮

冬は古日にあやさ麦の粉　羽笠

一秋乃古宮を馬に寄られや　[illegible]

こゝろ掛まつるそばかきの月　且藁
陽炎乃もえの古寺のまゝ婦みて　越人
春雨ふりし法寿のさくしく　荷兮
ワ田となるかさの里にせよかり　羽笠
刀乃節をはなし中乃子　野水
其十三
蓮や三井の寺ある此縁とりま　且藁
きつひく乃しなし雲の山し　越人
見つきこもり末九日乃月さむき　荷兮
君乃後とあそ〳〵めこゝろ　羽笠

三月十六日且藁乃田家にとゝまりて

蛙乃からきゝ月申しきさ乗てえぶ　野水

ウ
瀬よわらは春の雨そゝり　且藁
荻家の岩本乃奥まで宿りて　越人
まつしく人をとゝる陰鳥乃子　荷兮
立て乃子瀬しの舟乃月影に　冬文
芦荻穂をかゝる傘の端　鵜守
篠ぎりよ絶縁鬼の僧の集りて　且藁
君のあひより茂そゝある里　野水
雨乃日も瀬焼せん煙とゝり　荷兮
ひとはきゝても絲乃一はよ　越人
弱よ家坊主八月まん後押りて　野水
解てやをかん枝なきよ松　冬文
今やり生更ゆるてやしな

月十九日荷兮室にて

咲ミきの菊手を折しきさ白露そ　越人
秋乃和名又へのし順　且藁
砂一丁の夕よこ門を火を打ぬ　冬文
別の月よわらしくあしこ主坊　荷兮
総でおにの宮よりハ唐輪にて　且藁
君ゆく道の草もむつかし　野水

二

秋き目やと影をけるよ忘る人　荷兮
簀乃子菜生ゆる雨の中　越人
鄙鴎か瓢をありて貧れなく　野水
連寿のまれあしく物いそがし　冬文
流蘇可業　押まくて書きそ人　越人
岩苔より乃庵にさきまし　且藁
むさぼりに衣ふりあるく世の中に　冬文
疑二ねも亦ろきこゐ庵　越人
新毎乃香語あそれされ麦飯ル　且藁
来るうちを送り子まあくの月　野水
朝のすさ秋の日舟に網入よ　荷兮
島羽乃湊れ抑くの笑ひ子　冬文
あはましれさてね流デもつくるぬ　野水
はかしく一節舞のなをよし　荷兮
家長乃おほ脱よ寝起て　越人
孫を留はいとへ君の代　且藁
山も花不のまつれ拾よ日に　冬文

果しんでくしぞ雲雀の声あり　荷兮

追加

三月十九日舟泉亭　越人

山吹乃あふ行き也の名されは　舟泉

蝶多ゆくしに知らぬ岩ほし　聴雪

きりしなや隣晒さつき雪ありて　鑑髭

行幸乃跡のかたに土器　荷兮

朔日を隣りの鍛冶のいそがしく　戦筆

月なきに宮乃門をやくあを

春

昌陸乃松とハ子ぬ千代の春　利重

元日の来ぬるの聴馬呈申しし　重五

秋萩乃遠里牛をたて見日於　昌圭

乃さの萩海を知しあり麦乃泉　両桐

門を松芳菜園の雪さむし　舟泉

鯉の音水不乃閑く梅白し　羽笠

舟くし乃小松に雪の残り　且藁

曙乃人顔牡丹霜ふひきりう　杜国

痩てし次元日里乃賑りこれ　犀夕

星さししかきまぬ先のほうる色　香庭

乃ふえても小松負ふる牛乃足　聴雪

朝日二分柳の動く匂ひかれ　荷兮

先以く他乃栄ひくき霞かな　同

芹摘しくてけく汲ぎき鶏うね　且藁

のうまゝる人乃浴へ行とて

みつ人まちた白髪いやし 夕すとこ　越人

古池や蛙飛こむ水乃おと　芭蕉

傘張乃睡り胡蝶のやどり哉　重五

山茶花墻根くの湯とかなし　亀柏

花よりうつれて夜より雨ま晴見る哉　越人

春野吟

足跡に桜を曲る庵二つ　杜国

蓁寺かられぬけれどさくらかな　李風

桜木すて桜乃遅きあかな　荷兮

餞別

麓の花見こそ別れ　越人

山畑乃茶園のくさとりし夕日の名　重五

蝦かゝりて漏る遣めぐ手器の不　月

夏

あくぎんさ乃山きる尾八花　九白

郭公さゆのし燈くぬる夜哉　李風

かつこ鳥板屋乃背戸の一里塚　越人

うきしきを家かられ梅の雨かな　杜国

若竹のうしろあてたる雀かな　亀洞

傘をさしてまで営の夕顔哉　舟泉

武蔵野をさゝあかしぬ　

まだかすや声のゆく夏乃衣川　荷露

逢坂乃夜ハ笠こそあるへし

るうへまりおくれさりぬる夜の月　　駝雪

老聃曰知足之足常足

夕かほに雑炊あつき草屋かな　　越人

箒木の微雨こぼれて鳴蝦かな　　柳雨

けしきにハなかなか弁ものかりの　　塵交

萱草ハたゞに黒き花の色　　荷兮

蓮池のふかさわするゝ浮葉かな　　仝

暁の夜陰て家座は遅きか那　　昌圭

夏川の青きにたかき本草路哉　　重五

譬喩品ノ三界無安猶如火宅

とかくなかを

夕月の汗ぬぐひ飛る墓のれ　　越人

秋

蓬戸の畑ケたまが菜をみてさりくれ　　旦藁

貧家の玉祭

玉祭柱にむかふ人二の紙　　越人

下さくまさ二藤六をお梅かな　　雨桐

雲れしく人をやもと切る月見かな　　芭蕉

山寺に米はくかその月夜かな　　越人

見かく家も面白しや秋の月　　野水

八端をかける屏風の縁をえて

見のあさ顔のとるし月見舟　　仝

待恋

こぬ人をとかく恋にし見知らさん　　荷兮

閑居箴

秋ひとり琴柱はづれて寝覚かな　荷兮

鳧鳥もまた一つみんなかれの哉　舟泉

冬

てるそめぬ生十八夕日此村しぐれ　杜国

芭蕉翁を宿し侍りて

霜寒き旅寝に蚊屋を着せ申し　大垣住 如行

きれゑ葬の子乃薄かれ　昌碧

るをさくたうむら雲のあ長け　芭蕉

もり焼の煙けふもまちかねかれ　越人

芭蕉翁を送りてかへる附

このはぬかなきしたか名残かれ　杜国

隠士をかりたる家に室をまうけて

あさしき家袋ひとつの手箒　荷兮

冬乃日

笠は長途の雨にほころび紙衣はとまりとまりのあらしにもめたり侘つくしたるわび人我さへあはれにおぼえける昔狂哥の才士此國にたどりし事を不図おもひ出て申侍る

狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉　芭蕉

たそやとばしるかさの山茶花　野水

有明の主水に酒屋つくらせて　荷兮

かしらの露をふるふあかむま　重五

朝鮮のほそりすゝきのにほひなき　杜国

日乃ちりぢりに野に米を刈　正平

わがいほは鷺にやどかすあたりにて　野水

髪はやすまをしのぶ身のほど　芭蕉

いつはりのつらしと乳をしぼりすて　重五

きえぬそとばにすごすごとなく　荷兮

影法のあかつきさむく火を焼て　芭蕉

あるじはひんにたえし虚家　杜国

田中なるこまんが柳落るころ　荷兮

霧にふねをひく人はちんばか　野水

たそがれを横にながむる月ほそし　杜国

となりさかしき町に下り居る　重五

二の尼に近衛の花のさかりきく　野水

蝶はむぐらにとばかり鼻かむ　芭蕉

のり物に簾透顔おぼろなる　重五

いまぞ恨の矢をはなつ声　荷兮

ぬす人の記念の松の吹おれて　芭蕉

しばし宗祇の名を付し水　杜国

笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨　荷兮

冬がれわけてひとり唐苣　野水

しらじらと砕けしは人の骨か何　杜国

烏賊はゑびすの国のうらかた　重五

あはれさの謎にもとけし郭公　野水

秋水一斗もりつくす夜ぞ　芭蕉

日東の李白が坊に月を見て　重五

巾に木槿をはさむ琵琶打　荷兮

うしの跡とぶらふ草の夕ぐれに　芭蕉

箕に鮗の魚をいたゞき　杜国

わがいのりあけがたの星孕むべく　荷兮

けふはいもとのまゆかきにゆき　野水

綾ひとへ居湯に志賀の花漉て　杜国

廊下は藤のかげつたふ也　重五

おもへども壮年

いまだころもを振はず

はつ雪のことしも袴きてかへる　埜水

霜にまだ見る蕣の食　杜国

野菊までたづぬる蝶の羽おれて　芭蕉

うづらふけれとくるまひきけり　荷兮

麻呂が月袖に鞨鼓をならすらん　重五
桃花をたをる貞徳の富　正平
雨こゆる浅香の田螺ほりうへて　杜国
奥のきさらぎを只なきになく　野水
床ふけて語ればいとこなる男　荷兮
緑さまたげの恨みのこりし　羽笠
口おしと瘤をちぎるちからなき　野水
明日はかたきにくび送りせん　重五
小三太に盃とらせひとつうたひ　芭蕉
月は遅かれ牡丹ぬす人　杜国
縄あみのかゝりはやぶれ壁落て　重五
こつ〳〵とのみ地蔵切町　荷兮

初はなの世とや嫁のいかめしく　杜国
かぶろいくらの春ぞかはゆき　野水
櫁あさえに鰐とゆる緑やあのうちなる　羽笠
うつひを起す蔵の鍋とりして　芭蕉
篠ふかく梢は柿の蔕さびし　野水
三絃からん不破のせき人　重五
道すがら美濃で打ける碁を忘る　芭蕉
ねざめしてのさそて七十　杜国
奉加めされ帳にも重ねらるゝひ　重五
ひとりの鉦一片峯りさけ　荷兮
蓮池に鷺の子遊ぶ夕まぐれ　杜国
まどをつくらう茨檐をさゝさ　野水

月にきえてる唐瀬の鬢紫枯く　荷兮
魚をぬすみしめく臨隣どなり　越人
秋蝶の虚にをそくとんできさ八　野水
蓑の実一つふ宿下かつちり　重五
彼より砚をひつさげ出つされ　芭蕉
殿より曲侍の為この内侍この　杜国
三ケ月を鸚鵡尾に乞ありくさ　重五
しら雪にさむ紙の猫活剤　荷兮
つえ杖の紫僮に十歩　杜国
はくなくのゑて月とり落すを罷外
こわりぬくとりかのいくつま　重五

薗栗の莖を神鋳人に天に貢して　野水
八の所門を打しあ宮えるる　芭蕉
馬嚢橙あらされ風の声にのすぎ　荷兮
菜汁濁者枸しむ生への痛英　正平
飛くるけふ椰よむ娘りつるて　重五
燈籠ふくる川にかくさきぞるる　杜国
つゆ萩の寸の力と撰かれさと　芭蕉
驀妻ニて青し滋賀茶の坊　野水
新月夜双六うらの旅ねして　杜国
不盡買みちにほしくまれこく　荷兮
志の今陽のわさとて雛を袖りたる　野水
三夜帰の夏より来るんとこす　重五

まがきまで津浪の水にくづれ行　荷兮
佛喰たる魚解（ホト）きけり　芭蕉
縣ふるはな見次郎と仰がれて　重五
五形（ゲンゲ）菫の畠六反　杜国
うれしげに囀る雲雀ちりちりと　芭蕉
眞昼の馬のねぶたがほ也　野水
おかざきや矢矧の橋のながきかな　杜國
庄屋のまつをよみて送りぬ　荷兮
捨し子は柴苅長にのびつらん　野水
晦日（ミソカ）をさむく刀賣る年　重五
雪の狂呉の國の笠めづらしき　荷兮
襟に高雄が片袖をとく　芭蕉

あだ人と樗を檜に香をかさん　羽笠
芥子のひとくは名をとこなれ禅　杜國
三ケ月の東は暗く鐘の聲　芭蕉
秋湖かすかに琴かへす者　羽笠
烹る事をゆるしてはぜを放ける　杜国
聲よき念佛藪をへだつる　荷兮
かげうすき行燈けしに起侘て　野水
おもひかねつも夜るの帶引　重五
こがれ飛たましゐ花のかげに入　荷兮
その望の日を我もおなじく　羽笠

なに子波津のあし火燒家をまもりけるなと

炭賣のをのがつまこそ黒からめ　重五
ひとの粧ひと鏡磨寒　荷兮
花棘馬骨の霜に咲かへり　杜国
鶴見るまどの月かすかなり　野水
かぜ吹ぬ秋の日瓶に酒なき日　芭蕉
荻織るかさを市に振する　羽笠
賀茂川や胡麻千代祭り微甘き　荷兮
いてらの尊なつかしおもふ　重五
杉りふてゝ布擣哥にわかれて　野水
うき我をそゝろに彼穀る三平　杜国
捨られてくねるか鴛の離鳥　羽笠
火をとらぬ火鉢ある人と見る葬　芭蕉

門守の翁に紙子かりて寝る　重五
血刀かくす月の暗きに　荷兮
霧下りて本郷の鐘七つきく　杜国
ふゆまつ納豆たゝくなるべし　野水
はなに泣桜の黴とすてにける　芭蕉
僧ものいはず欵冬を呑　羽笠
白燕濁らぬ水に羽を洗ひ　荷兮
宣旨かしこく釵を鋳る　重五
八十年を三つ見る童母もちて　野水
なかうらそむる七夕の歌　杜国
西南に桂のはなのつぼむとき　羽笠
蘭のあぶらに〆木うつ音　芭蕉

絲のみだれ賢ある女ひとこのころ　重五
伯顔に粟をあたふ十日のくれ　荷兮
まかりまかく揚子かゝる正月に　杜国
法ぐ笑ひ向る舞の袖　野水
寅乃日の旦を鍛冶の急起て　芭蕉
雲かゝりて南京の地(ツチ)　羽笠
いがきして誰ともしらぬ人の像　荷兮
泥にこゝろのきよき芹の根　重五
粥すゝるあかつき花にかしこまり　正平
狩衣の下に鎧ふ春風　芭蕉
北のかたなくなく簾おしやりて　羽笠
ねられぬ夢を責るむら雨　杜国

田家眺望

霜月や鸛(カウ)の彳々(ツクツク)ならびゐて　荷兮
冬の朝日のあはれなりけり　芭蕉
樫檜山家の体を木の葉降　重五
ひきずるうしの塩こぼれつゝ　杜国
音もなき具足に月のうすうすと　羽笠
酌する童(ワラハ)蘭切にいで　野水
秋のころ旅の御連歌いとかりに　芭蕉
漸くはれて富士みゆる寺　荷兮
寂として椿の花の落る音　杜国
茶に糸遊をそむる風の香　重五

雉追に烏帽子の女五三十　野水

庭に木曾作るこひの薄衣　羽笠

なつふかき山橘にさくら見ん　荷兮

麻かりといふ小哥の集あむ　芭蕉

江を近く独楽庵と世を捨て　重五

我月出よ身はおぼろなる　杜国

たび衣笛に落花を打払　羽笠

籠輿ゆるす木瓜の山あい　野水

骨をみて坐に泪ぐみうちかへり　芭蕉

乞食の簑をもらふしのゝめ　荷兮

泥のうへに尾を引鯉を拾ひ得て　杜国

御幸に進む水のみくすり　重五

ことにてる年の小角豆の花もろし　野水

萱屋まばらに炭団つく臼　羽笠

芥子あまの小坊交りに打むれて　荷兮

おるゝはすのみたてる蓮の実　芭蕉

しづかさに飯台のぞく月の前　重五

露をくきつね風やかなしき　杜国

釣柿に屋根ふかれたる片庇　羽笠

豆腐つくりて母の喪に入　野水

元政の草の袂も破ぬべし　芭蕉

伏見木幡の鐘をなはうつ　荷兮

いろふかき男猫ひとつを捨かねて　杜国

春のしらすの雪はきをよぶ　重五

水干を秀句の聖わかやかに　那乃

山茶花匂ふ笠のこがらし　ゆゑ

追加

いかに見よと難面うしをうつ霰　羽笠

樽火にあぶるゝかれ枝の松　荷兮

とくさ苅下着に髪をちやせんにて　重五

檜笠に宮こゑ屋川を越る　杜国

狼より嫁かりし月を海　芭蕉

ひよろよろ橋をさとの波阜山　野水

ひさご

江南乃珍碩我にひさごを送れりこれハ是水漿を
もり酒をたしなむ器にもあらず或ハ大樽に造りて
江湖をわたれといふにもあらず瓢にも異なり吾すむ里の
恵子にして用ゐるよと残しつゝしそれ有けり
小膝しあやまりてけくちに隋る醉をつめる日月
陽秋をわらひにして雪れあけ和の闇の郭公も
このひさごに納てなにをか呑人もなからるるあるべき皆
風雅乃藻思をいへり是ハこれの中より
出て乾坤の外なる事を思ひそのことをしる毎日
此内にまゐり入

元禄三六月

越智越人

花見

木のもとに汁も鱠も桜かな　翁

西日のどかによき天気なり　珍碩

旅人の虱かき行春暮て　曲水

はきも習はぬ太刀の鞘　翁

月待て仮の内裏の司召　碩

籾臼つくる杣がはやわざ　水

鞍置る三歳駒に秋の来て　翁

名はさまさまに降替る雨　碩

入込に諏訪の涌湯の夕ま暮　水

中にもせいの高き山伏　翁

いふ事を唯一方へ落しけり　碩
ほそき筋より恋つのりつゝ　水
物おもふ身にもの喰へとせつかれて　翁
月見る顔の袖おもき露　碩
秋風の船をこはがる波の音　水
雁ゆくかたや白子若松　翁
千部読花の盛の一身田　碩
巡礼死ぬる道のかげろふ　水
何よりも蝶の現ぞあはれなる　翁
文書ほどの力さへなき　碩
羅に日をいとはるゝ御かたち　水
熊野みたきと泣給ひけり　翁

手束弓紀の関守が頑に　碩
酒ではげたるあたま成らん　水
双六の目をのぞくまで暮かゝり　翁
仮の持仏にむかふ念仏　碩
中〳〵は土間に居れば蚤もなし　水
我名は里のなぶりもの也　翁
憎れていらぬ躍の肝を煎　碩
月夜〳〵に明渡る月　水
花薄あまりまねけばうら枯て　翁
唯四方なる草庵の露　碩
一貫の銭むつかしと返しけり　水
医者のくすりは飲ぬ分別　翁

花咲ば芳野あたりを欠廻　水
虻にさゝるゝ春の山中　碩
翁十二　珎碩十二　曲水十二

いろいろ乃名もむつかしや春の草　珎碩
うたれて蝶の夢ハさめぬる　翁
蝙蝠ののどかにつれとさしこめて　路通
かゝる龕乃とくとしぬ炸越より　仝
紫蘇の実をかますに入る夕間暮　碩
親子ならびて月に物くふ　仝
秋の色宮もの乃きぬ荒なあり　通
こきをふくしをけくハつらうよ侘　仝

うつり香乃羽織を首にひきかけて　碩
小六うたひし市のかへるさ　仝
鯰釣乃ちいさくみゆる川の端　通
念仏申しておがむみつかさ　仝
こしらえし薬もれぬと年の暮　碩
庄野の里乃犬ニおどされ　仝
旅姿稚き人乃嫗連れて　通
花まちのみな月ハ雛　仝
赤不のさゝと橡の下を日和なり　碩
生鯛あがる浦の春さめ　仝
此村の廃されし醫者ありけり　荷兮
まくらたくむとけたるのさかりよ　越人

かへらさるも世を退居もせんとする　兮
まよひ海わきに須乃けふりは　人
なきの姿やる秋乃夕そそぐひとつき　兮
蕎麦きく白くし山の胴中　人
うかんより里乃わかれ秋月の影　兮
まかりとくつ子かいふ裸坏し　人
負つをしやすの白亭之と立よ手まも　兮
文珠の智恵も般若特の愚癡　人
おのれか城又よふ新来ひし在嗜　兮
何ともまぬよ後る詣相　人
志のふ萩の枕つうふみて笑ひ欲ス　兮
あきふとまき款をつくぬおして　仝
汗の香をかくるて衣を取り捨し　人
まきらされ雨ともちあはそふる　仝
苑さくのり又百人者膳立よ　兮
まハ旅ともわをたまる旅　仝

珠碩九　翁一　路通八
荷兮十　越人八

城下

鉄炮乃音に曇る卯月か　野径
砂の小麦乃痩てさらく　里東
西風もよせ寸布の小貝拾ハせて　泥土
なかれぬるる一川鵜ひかゝり　乙州

碁いさゝひ二人志つりる夜半ま　怒誰
秋の露蓄け袖をうちあら　珎碩
女郎花ゐ細うれれそれて　筆
月のかけ　むらとくつえ杢かちある　野径
冬の文川京留しとくと愛くし　里東
鶏乃むくつきさ生　つきや　泥土
馬より荷物を屋をとらゆとく　乙州
一里こ紀行て山乃下　菊　怒誰
又ゑゝまゝく岩屋よ見送て　泥土
拙れ奄ハ洞ゐよしくれと　里東
雪舟よ乗ぶ哉の老尊をきうれ　荷径
きおのにつあく下百の機　乙州

月花にみ座をよみてるゆゝせ　珎碩
葵もゆ乃撓たかゝき早蕨　怒誰
えおれまにあても都もすれす　里東
出家遠れ　境を経　むかす　珎碩
乃みにりゝ屋酒の荒の一蹀　乙州
古きをくちなんのとる緑鬼　荷径
附く白粧すても烏帽子まて　怒誰
配所を見出よ供御乃蛤　泥土
ゑみそかふ迄ハ船遊具の浸やらん　珎碩
連もカそ皆在頭なり　里東
かし風乃大罡寺縄を吹通し　荷径
虫乃こゑるに周りけへしさ　乙州

鋼剛き萩をちいさき花咲て　泥土
夕辺の月に菜食喰ふもを　怒誰
看経乃嗽して嘆気勢　里東
四十をも老と云つましき際　珍碩
髪くせに梳乃油を薄塗て　乙州
碑を細縄にからげて出る　野径
杉村の花八つ頃に花咲き　怒誰
田中庁隅に苗乃とりはし　泥土

野径　六　　里東　六　　泥土　六
乙州　六　　怒誰　六　　珍碩　五
筆　一

雑

亀の甲並べて時を嗚せん　乙州
唯牛糞に風のふく音　珍碩
百姓乃本綿仕まへば冬のきて　里東
小哥そろゆるかしらの縄　探志
猪に擦る奥の間ひろき蕨の月　昌房
蟷螂落てきゆる切れ跳　正秀
秋萩の御前にちらす紙鳶　及肩
風呂の掃除が減乃去つくの滅り　野径
鴬乃きさあそびに鳴出し　二嘯
雪のやう取るかすまでの塵　乙州
初花に雛の巻櫓を拾なく　珍碩

んのそこに点てあらもりる　里東
淡蘆原乃香に吹そこ乱し笛の役　探志
寐ころんで起て出ふる時　昌房
猪入の巾着ふく月にかり　正秀
すゝき上京をミゆるやしきむ　及肩
藪に盛る香羽の町屋かゝ筆菜　飛伝
崖を越ふ篭乃ちくぬき　一寺
うすと墨る月とんみえておわまて　乙州
雉子のひなし無あまのむこのぬる　珎碩
浦くくうさ本解給の袷すそ色　里東
撰わきされく言さしあけ平の　探志
暗かりそ小菜積乃下さゝく行　昌房

雑

亀の甲京ろうて時を鳴かせん　乙州
唯牛糞に風乃ふく音　珎碩
百姓乃本郷住まて死のきて　里東
小奇おろうゆるかしら人の縄　探志
獨寐く奥の間ひろ紀縁の月　昌房
蟋蟀落てこゝゆるり蛇　正秀
秋の萩の海苔まちの紀坊を荒　及肩
風呂汁加減乃声つくの数乃り　飛伝
堂乃きまさ妻尓く鳴あし　二寺
宮のやうゝあるかすまての塵　乙州
初花に雛の事楼飛たゝく　珎双

んのそくふ気そあつまりける　里東
此笠原乃香ふ吹そ気ー笛の役　探志
麻〻くれ起て女八多啼　昌房
秋入の巾着ゟく月ふ以　正秀
少まし上京をつんゆるやくさむ　及肩
鬱ふ答ふる香羽の町屋ゟ今年米　野径
雀を荻ふ笹竜乃ぢく免き　一啼
うまと暑る月をそんみつそと影井まて　乙州
紗ゆひなし西まつのむつゐる　珍碩
磯くらき本浮給の絲すとも色　里東
探ゆすはれく云まくさあけ分の　探志
暗かりまゝ小菜積乃下さまをり付　昌房

僧ころを呼るらなまかり口　正秀
いさまさゐる鐘一筋に挟筥　及肩
手汲かまる鯉棚乃秋　野径
此八くもの切藁の紙まま風吹て　二嘯
遠加乃席ふまず不の秋月　乙州
吟稿不味のつくりそ嬉し逢　珍碩
燐掃らち八次ヨ房参らし　里東
目をぬくし衣尻のうそにもあひそ　探志
ちひみち　かしこき云れ上侍　昌房
手そらしふ手拭ゐちて縁にさけ　正秀
縄を集る寺の上蔵　及肩
花乃此置の日ぶふんでゝそ　野径

さゝらに狩へ獅子の古凡　一寉

乙州　四　孫頌　仝　里東　巴
探志　仝　昌房　仝　正秀　仝
及肩　仝　野徑　仝　二嘯　仝

田野

嚮道や苗代時乃角大師　正秀
明きえ乗む無嵐乃剥　孫頌
嶺ふとのかやをに鳴し去の花　仝
かやゑ狩りしき聞口の文字　秀
月影に利休乃南を鼻ま無　仝
咲く〳〵草をとそしそろくなり　頌
虫毛踏つ跡しと明そらむ　秀
行呈しの木履さらぬる　頌
撰文と百もあてしるお縁に　秀
たからさくこ乃り他乃侍　頌
須二八すさ抱ふ自由たる彖に　秀
狐の出る弓かつこふやる　頌
月出る師走先の銀河　秀
丟ふ狩に弄さる縮も進まん　孫頌
しぬとて大勝指も守られて　秀
指ある子も綾錦ま習ふ姿　頌
汲み湯をなみ咲か我に恵しめ　秀
あいの山弾なきぬべ年　仝

雲雀啼里ハ厩糞かき散し　几

火をふくて飛る禅門の祖父　秀

本堂ハまた荒壁のしらしら組　几

羽織綾ぬ袂ちぎれし縫ひめ　秀

歯を痛人乃なやみ泪に書て　几

藤かゝりむすびし腰より　秀

蔓垣乃室は色姫を接とき　碩

口上書ぬいふさまよれ財宜　秀

負ふ中に行ふ小判ゝ紙子草鞋　碩

秋入初る肥後乃隈本　秀

饗白縫も皆て月入る鉄砲弘　几

ます布子ひとつ新米之乃里　秀

沢山ハ兀めしに吃られて　几

峰あるきなかも猫を踊ります　秀

子綴ほ小人町乃雨あくり　几

やし河の楓木の芽蒲立　秀

叢花ふ雲縫換つるまがひて　碩

如来しる堀ふおゆるのきろふ　秀

正秀　十九　　珎碩　十七

猿蓑

晋其角序

俳諧の集つくる事古今にわたりて此道のおもて起べき時なれや幻術の第一として其句に魂の入ざればゆめにゆめみるに似たるべし久しく世にとゞまり長く人にうつりて不変の変をしらしむ五徳はいふに及ばず心をこらすべきたしなみなり彼西行上人の骨にて人を作りたてゝ声はわれたる笛を吹やうになん侍ると申されけれ人には成て侍れども五の声のわかれざるは反魂の法のおろそかに侍にや されはたましゐの入たらばアイウエオよくひゞきていかならん吟声も出ぬべし 只誹諧に魂の入たらむにこそとて我翁行脚のころ伊賀越しける山中にて猿に小蓑を着せて誹諧の神を入たまひければたちまち断腸のおもひを叫びけむあたに懼るべき幻術なり これを元として此集をつくりたて猿みのとは名付申されける 是が序もその心をとり魂を合せて去来凡兆のほしげなるにまかせて書

冬

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也　芭蕉

あれ聞けと時雨くる夜の鐘の声　其角

時雨きや並びかねたる魦舟　千那

幾人かしぐれかけぬく勢田の橋　僧丈艸

鑓持の猶振たつるしぐれ哉　膳 正秀

廣沢やひとり時雨るゝ沼太良　史邦
舟人にぬかれて乗し時雨かな　尚白
　伊賀の境に入て
なつかしや奈良の隣の一時雨　曽良
時雨るゝや黒木つむ屋の窓あかり　凡兆
馬かりて竹田の里や行しぐれ　大津 乙州
だまされし星の光や小夜時雨　羽紅
新田に稗殻煙るしぐれ哉　ゼゝ 昌房
いそがしや沖の時雨の真帆片帆　去来
なへつまふりや北斗の星の前　イカ 百歳
一いろも動く物なき霜夜かな　野水
淀ゆく

はつしもに何とおよるぞ舟の中　其角
帰花それにもしかん莚切　同
禅寺の松の落葉や神無月　凡兆
百舌鳥のゐる野中の杭よ十月　嵐蘭
こからしや頬腫痛む人の顔　芭蕉
砂よけや蜑のかたへの冬木立　凡兆
　ならにて
棹鹿のかさなり臥る枯野哉　イカ 土芳
渋柿をながめて通る十夜哉　ゼゝ 椐道
ちやのきはや隠て人に[illegible]　越人
このむしろ乃案の苑ゆつる[illegible]　イカ 猿雖
古寺の簀子も青し冬かまへ　凡兆

八兵衛の隠居に冬籠をまうく

雑炊のなどころならば冬ごもり　其角

この冬さ牡丹のうれのまゝり裸　伊賀 車来

草津

晦日もとゝるもくもろひのこゝのれ　尚白

氷垂水にまちうつるの鉢　弥碩

霜月朔旦

禰宜ひとり外に酒ちし赤柏　イガ 良品

子や母の自は水を程ほどに仏壇　羽州 不玉

今は世をたのむけしきや冬の蜂　尾張 且藁

尾頭のこゝろもとなき海鼠哉　去来

一夜一夜さむき姿や釣干菜　イガ 探丸

みちばたに多賀の鳥井の寒さかな　尚白

茶湯とてつめたき日にも稽古哉　江戸 亀翁

炭竈に手負の猪の倒れけり　凡兆

住つかぬ旅のこゝろや置火燵　芭蕉

寝ごゝろや火燵蒲団のさめぬ内　其角

門前の小家もあそぶ冬至哉　凡兆

木兎や杉のひ切る昼の面（ツラ）　ヨア 芥境

みゝづくは眠る処をさゝれけり　イガ 半残

貧交

まじはりは紙子の切を譲りけり　丈艸

浦風や巴をくづすむら鵆　曽良

あら礒やはしり馴たる友鵆　去来

狼のわく臨僧ぬや淡かな　史邦

脊門口の入江にのぼる千鳥かな　丈艸

いの川とふく雪にまぎれて鳴千鳥　千那

矢田の野や浦のなぐれに鳴千鳥　凡兆

筏士の見かへる跡や鴛の中　木節

水底を見て来た貌の小鴨かな　丈艸

鳥共も寝入てゐるか余吾の海　路通

死まじく探歎く人の霜のうへ　昌東

襟巻に首引入て冬の月　杉風

この木戸や鎖のさゝれて冬の月　其角

かりしきれ蒲團ころびや冬の旅　大津 暮年

見おくるさへ旅人寒し石部山　大津尼 智月

翁より紙衾をあたへらるゝ時ありて思ひし

首出して初雪見ばや此衾　美濃 竹戸

題竹戸之衾

ゑてめをこはるゝ身はおしれぬ紙衾　荊口

奥の池鶴乃歩みやせまき氷かな　探丸

吉川やさを越る波も網代守　丈艸

　師白翁に侍りて

膝つきにかしこまり居る霰かな　史邦

椶櫚の葉の音は霰に打しかな　野童

鶴乃稀にして降りも雁散りくれ　木蜂

呼うてて鶏変るぬかるみかな　凡兆

さうれ遅る音や軒端の出る日かな　膳所 晝好

そつと来や門に張さく人ハ後　其角

初雪に鷹部屋のぞく朝朗　史邦

霜やけの手を吹てやる雪まろげ　羽紅

わぎも子が爪紅粉のこす雪まろげ　探丸

下京や雪つむ上の夜の雨　凡兆

ながながと川一筋や雪の原　同

信濃路を過るに

雪ちるや穂屋の薄の刈残し　芭蕉

草庵の留主をとひて

衰老ハ簾もあげぬ菴の雪　其角

[illegible]　尾張 羽笠

[illegible]健[illegible]　長崎 卯七

[illegible]のてしまさき　去来

晋亜追悼

乳のみ子に世を渡したる師走かな　尚白

から鮭も空也の痩も寒の内　芭蕉

[illegible]情を[illegible]似合ぬそのゝ内　乙州

一月は我に米かせはちたゝき　丈艸

住吉奉納

夜神楽や鼻息白し面の内　其角

[illegible]　膳所 須琢

[illegible]　日 祐甫

乙州が新宅にて

人に家をかはせて我は年忘　芭蕉

弱法師我門ゆるせ餅の札　其角

出替の幼ごゝろや物あはれ中々小さき綸　長和

うすはなのつまきて行ちかしの影　麦泰

うきてもひと年のよるけや行路くるまの　同

大としやあれをとられたる人ごゝろ　羽紅

やりくれて又やさむしろ歳の暮　其角

いねいねと人にいはれつ年の暮　路通

年のくれ破れ袴の幾くだり　杉風

夏

子鳴の面掛てくずやほとゝぎす　亀角

夏かけし星乗ぶ時鳥　李節

野を横に馬引むけよほとゝぎす　芭蕉

時鳥ひとふしかなふて啼もなし　尚白

ほとゝぎす何もなき野の門ン構　凡兆

ひるよるもさしおいてうを鳴る　智月

蜀魂なくや木のまの角櫓　史邦

入あひのひゞきの中やほとゝぎす　羽紅

ほとゝぎす滝よりかみのわたりかな　丈草

心なき代官殿やほとゝぎす　去来

てひとつをちる塚であけかましほとゝぎす　桜女 奥州

松嶋一見の時千鳥もかるや鶴の
毛衣とよめりければ

松嶋や鶴に身をかれほとゝぎす　曽良

うき我をさびしがらせよかんこ鳥　芭蕉

膳所ニ居せし庵室をとひて

若楓茶いろになるも一さかり　膳所 曲水

四月八日詣慈母墓

峯のからつくりつける花乃式　其角

葉このくれぬ若花を牡丹の後の外　江戸 全峯

別僧

ちるときの心やすさよ罌粟（ケシノ）花　越人

知るも見ゆる人あるを見送れ哉　路通

若葉に隠られてすみあはれ見送りて　古人 杜国

似合しきけしの一重や須广の里

まろ〳〵と白ひるげのしりしの墓　嵐蘭

井のすゑは浅く清し杜若　半残

起出て物まださまれぬ朝の乃

起しの心うごかすかきつばた　仙化

題去来之嵯峨落柿舎二句

豆植る畑も木部屋も名所かな　凡兆

破垣やわざと鹿子のかよひ道　曽良

南都旅店

淀のさくなりし其我乃園の桐　千那

淡清やきぬまさ〳〵迎榎の花　尾張 薄芝

豊國にて

竹の子の力を誰にたとふべき　凡兆

あつけなや畠蕩に悪きころ　去来

かけの子や稚き時の絵のすさみ　芭蕉
梢に吹かへさるゝそりしこのみ　正秀

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月　芭蕉
君が代や筑摩祭も鍋一ツ　越人

五月三日ことふきせる家にて

屋根葺と並てふける菖蒲かな　其角
粽結ふかた手にはさむ額髪　芭蕉
隈篠の広葉うるはし餅粽　江戸 岩翁
さかりしさに客人やしかまつりけり　尚白

五月六日大坂うち死の遠き名を弔ひて

大坂やみぬよの夏の五十年　伊賀 蝉吟

奥州高館にて

夏草や兵共か夢の跡　芭蕉
這出よかひやか下の蟾の声　月
此境はひわたるほとゝいへるもこゝの事にや
かゝる所に角ありけり次郎左　日
五月雨に家ふり捨てなめくじり　凡兆
稲妻に此味なき宗長か月夜　木節
ある士の謂ひ身ありさつさ雨　史邦

奥州名取の郡に入て中将実方の塚ハ
いつくのほとゝ問けれハ道より一里半
はかり左の方笠嶋といふ所にありと
おしゆふりつゝきたる五月雨いとわりなく

あく寺なるに

笠嶋やいつこ五月のぬかり道　芭蕉

大和紀行のさそひにてしはしとて行末の頃それをもてめくまかせてめにかれて料足つゝみたる紙のはしに書つけ侍る

つくりもなくて有し坂や五月雨　去来

髪剃や一夜に金精て五月雨　凡兆

日の道や葵傾くさ月あめ　芭蕉

縫物や著もせてよごす五月雨　羽紅

七十余の老翁みまかりけるにあたりてこそりてなくまてあはれいはむみのうをけるその老翁のまくらをしみけるに

えもいへる人まあつさりされハ気のつきなむまんして古今集まれなる年そふるときとかくしてさかくめにさそりけるに

六尺も力おとしや五月あめ　其角

百姓も麦に取つく茶摘哥　去来

あらしきや茶の山しもと霞つれ　正秀

つゝみ合子みそさゝいや麦畠　膳所 游刀

孫を愛して

麦藁の家してやらん雨蛙　智月

麦出来て鰹迄喰ふ山家かな　江戸 花紅

しら川の関こえて

風流のはしめや奥の田植うた　芭蕉

出羽乃最上をよきりて

眉掃を面影にして紅粉の花　仝

法隆寺開帳南無仏の太子を拝まて

涼袴此を掛つくし南無の声　千那

田の畝の豆つたひけり蛍かな　イガ　万乎

膳所曲水之楼にて

蛍火や吹とばされて鳰の闇　去来

勢田乃蛍見二句

闇の夜や子供泣出す蛍ぶね　凡兆

ほたる見や船頭酔ておぼつかな　芭蕉

三熊野へ詣てけるに

蛍見るさておそろしき八鬼尾谷　長崎　田上尼

あながちに鵜とせりあはぬ鴎かな　尚白

草むらや百合は中々それの貌　半残

病後

寛りやかしらふつて百合姿　何処

まき見やゑめうりしゑる百合の花　乙州

嫂殺孫を悼りて

子やなかん其子の母も蚊の喰ん　嵐蘭

餞別

立さまや蚊屋もたゝまぬ旅の宿　膳所　里東

うとく旅人につれて
奉宮する渡若にそれなりけりとて

みじか夜を吉次が冠者に名残かな　其角

隙明や蚤の出て行耳の穴　丈艸

下闇や地虫ながらの蝉の聲　嵐雪

客ぶりや居處かゆる蝉の聲　膳所　探志

頓てしぬけしきハ見えず蝉の聲　芭蕉

みじかさや盲麻刈る露のひま　伊賀　槐市

渡りかけて藻の花のぞく流かな　凡兆

舟引の妻の唱哥か合歓の花　千那

白雨や鐘きゝはづす日の夕　史邦

素堂ゝ蓮池ゑ
白雨や蓮一枚の捨あたま　嵐蘭

日焼田や時々つらくなく蛙　乙州

日の暑さ盥の底の蠛かな　凡兆

水無月も鼻つきあはす数寄屋哉　同

日の岡やこがれて暑き牛の舌　正秀

ちさく暑し雛子すれ〳〵髪の蔭　木節

志ろんこの藪蝎く風にあつかり　野童

夕がほによばれてつらき暑さ哉　羽紅

青草を湯入家らあんあ刈さかな　江戸　巴山

千子が身まかりけるをきゝてみのゝ国より去来がもとへ申つかはし侍りける

無き人の小袖も今や土用干　芭蕉

水無月や朝めしくはぬ夕すゞみ　嵐蘭

[illegible]　宗次

[illegible]　凡兆

唐土に雲つく児乃ましくられ　千那
月鉾や児の顔出る窓の縁　尚白
夕ぐれや兀並ひたる雲の峰　去来
もし鳴て淡に入くく
雲れるを今の比叡ハ似さ翔う　大坂 之道

蓮

稲風や蓮をちらしぬ花一ツ　丞知 漬人
此句東武よりきこえ来りし素堂子
かれくとめ付ける蓋や秋の風　杉風
芭蕉葉は何になれとや秋の風　路通
人は似く猿も交る細秋のくせ　移硯
加賀乃全昌寺に宿して
終夜秋風きくや裏の山　曽良
芋の葉や露の落るを鶉の風　江戸 山川
あさ露や鬱金畠の秋の風　凡兆
たけ川の流にや猿ハ芝の紅葉か　去来
大比叡やしの字を引て暮の雲哉　野童
立ちりて帰るかれ木や相の苗　凡兆
文月や六日も常の夜には似ず　芭蕉
合歓の木の葉ごしもいとへ星のかげ　仝
七夕やあまりいそがばころぶべし　伊賀 小年 杜若
今宵も縁よりほしり又撲取　伊賀 土芳
朔日を鶉眠るる枯れけれ　伊賀 風麦
葬送やぬりこの蔓れはとてまた　伊賀 及肩

笑ふても泣きても似ざる木槿かな　嵐蘭

またとなく柄してるみ木槿かな　杉風

ある騰ひかるはちかくき柱の雨　子那

大きれてさ淡のある宿や嫉簾雨　史邦

そよくや藪の内より初あらし　旦藁

秋風やとても薄はうごくはず　三川 子尹

迷子の親のこゝろやすゝき原　羽紅

八朔おりふし雨しきりにして紫あさりの文
出ける庵にて
まのあたり桜の先の花の枝　凡兆

つくしよりかへりけるにひみといふ
山にて卯七に別て

君か手もましる成へし花薄　去来

草刈よそれか思ひか萩の露　平田 李由

元禄二年翁に供せられてみちのく
より三越路にかゝり行脚しけるに
かゝの国にていたはり侍りていせまで先
だち侍るとて

いつくにかたふれ臥とも萩の原　曾良

桐の木にうつら鳴なる塀の内　芭蕉

百舌鳥なくや入日さし込女松原　凡兆

初潮や鳴門の浪の飛脚舟　七入 落梧

堅田にて

病雁の夜さむに落て旅ね哉　芭蕉

海士の屋は小海老にまじるいとゞ哉　仝

加賀の小松と云所多田の神社の宝物として実盛が菊から草の
かぶと同じく錦の切あり遠き世の事
なつかしみのあまり懐しく物にたへて

むざんやな甲の下のきりぎりす　芭蕉

菜畠や二葉の中の虫の声　尚白

ありし物りや　蜑か小舟て鳴蚊八月よ
いまだにまうらでけり雨　風麦

名月や矢橋に渡る人とめん　千子

三ケ月に蠹(つか)のおちなをみくらかり　之道

粟稗と目出度なりぬる月夜かな　半残

月見せよ伏見の城の捨郭　去来

菊を黄金に帯して
物見ゆる松の雫よ露の秋　伊賀 土芳

加茂に詣　ふくき波のかゝる沙と
かの上人のたつねこし
ゆくかた物にきてたまへしとや

月影や鞍にみてし森の上　支郎

衣更の六条にかくるゝいてくれまかりけれ

新月やしつかに見えて鶴内裏　伊賀 卓袋

ともしてをみやみくて月の影　乙州

宗祇此世を見て年乃月の上座中言　丈艸

月の影しのぶ鹿の月ひとつ　丸雅

ぬりたてのひるきり月のあと　尚白

向の能きゝも月にくる聲かな　曽良

元禄二年つるかの湊に月を見て
気比の明神に詣遊行上人の古例をきく

月清し遊行のもてる砂の上　芭蕉

師秋明を粉骨を送葬して

うらやみの月もてらせる墓の上　去来

名月や雲を春秋の花の出る　膳所 昌房

月みんと人の誘ふにつれかし　翻紅

備前の川上の水底れをあつめ哉　尚白

初潮や鳴門の浪の飛脚舟　凡兆

一戸や衣もやぶれてこまむかへ　素堂

秤の種ある這しこそ身にしむれ　越人

法糟やかゝしもそれも咲ぬ菊畠　正秀

あまりてさうらさゆる鰤もな　嵐蘭

一鳥不鳴山更幽

物の音ひとりたふるゝ案山子哉　凡兆

むつましき柏子かゝえて里神楽　単己

旅枕庵のきゝ合に軒の下　江戸 千里

鵜ふくや法師鳥の若葉畠　珍碩

上りと下るゝ舟や縄の天　凡兆

鶺鴒(セイレイ)の橋にもえるし鱗つり　半残

ゆふぐれの間のうきとある菓の色　尚白

菊をとも切る鵜(ヒ)もかなり　其角

かゝる土なる鸛(ヒ)の鳴月やかゝえもちされ　珍碩

こ比乃おもはるゝ哉稲の秋　土芳

稲かつく母に出むかふうつら哉　凡兆

自題落柿舎

柿ぬしや梢はちかきあらし山　去来

しら浪やゆらつく橋の下紅葉　加賀小松 塵生

肌さむし竹切山のうす紅葉　凡兆

神田祭

されはこそひなの拍子のあはせけり
神田祭の鼓うつ音
拍子さへあつしよるりとや　蚊足

花すゝき大名衆をまつり哉　嵐雪

行秋の四五日弱るすゝき哉　丈艸

立出る秋の夕や風ほろし　凡兆

世の中は鶺鴒の尾のひまもなし　仝

塩魚の歯にはさかふや秋の暮　荷兮

春

梅咲て人の怒の悔もあり　露沾

上臈の山荘にましく侍りしにまかりて

梅か香や山路猟入ル犬のまね　去来

むめかゝや分入里は牛の角　加賀 句空

庭眞興

梅か香や砂利しき流す谷の奥　土芳

なつ嫁や胃たきさすに梅の花　半残

梅の香や酒のかよひのあらしき　膳所 蝉吼

むめが香や此一筋を蕗のたう　其角

子良館の後に梅ありといへば　芭蕉

御子良子の一もとゆかし梅の花　千那

鶯藪や作りたふれの軒の梅

灰捨て白梅うるむ垣ねかな　凡兆

日當りの梅咲ころや屑牛房　播州 支幽

暗香浮動月黄昏

入相の梅になり込ひゞきかな　風麦

武江におもむく旅亭の残夢

寝ぐるしき窓の細目や闇の梅　乙州

辛未のとし弥生のはじめつかた

よし野に日くれて梅のにほひしきりなりければ旧友

嵐窓が見ぬかたの花や匂ひを

案内者といふ句を日ごろはふかきこゝろの

やうに思ひ侍らざりしに折にふれて感動

身にしみてくゝり涙を押へさぶらふの余六

その夜の夢に正しくまみえて眠る

なしかしき亡人いまさで風雅を

忘るゝや

夢さめて又一匂ひ宵れ梅　嵐蘭

百八のかねて迷ひや闇のむめ　其角

ひとり寝も能宿とらん初子日　去来

野畠や鴈追のけて摘若菜　史邦

たつ市や雪に漕来る若菜船　嵐蘭

去九月あふみ川ちかのこゝにゆく　如行

憶公羽之客中

裾折て菜をつみしらん草枕　嵐雪

つみすてゝ蹈付がたき若な哉　路通

七種や跡にうかるゝ朝がらす　其角

我事と鯲のにげし根芹哉　丈艸

うすらひやわづかに咲る芹の花　其角

鶯の身をさかさまにはつね哉　仝

鶯よそなへしてあれは鶯かな　去来

鶯は音をさへ濁す藪の中　伊賀 一桐

鶯やそしや一声あれさらう年　江戸 渓石

うぐひすや遠路ながら礼がへし　其角

鶯や下駄の歯につく小田の土　凡兆

鶯や窓に灸をすゑながら　伊賀 魚日

やぶの雪柳ばかりはすがた哉　探丸

此猫をさるれ拔くさ柳かな　江戸 卜宅

垣こしにとらへてはなす柳かな　日 遠水

よこさ川梅ぬれぬき柳かな　尚白

青柳のしだれや鯉の住所　イカ 一唳

あさ汁や蛤いらず湯乃すゝき　日 木白

侍井乃二丁目もやくらの月　楊水

田家にありて

麦めしにやつるゝ恋か猫の妻　芭蕉

うらやまし思ひ切時猫の恋　越人

うき友にかまれて猫の空なかめ　去来

露沾公にて餞別の當座

春風にぬきもさためぬ羽織かな　亀翁

みくまれちりし月さき二月かな　尚白

出かはりや櫃ておかするこきれさけ　龜翁

出かはりや幼こゝろに物あはれ　嵐雪

當帰のかしらもえる青かな　凡兆

白魚や海苔は下部のかゐ合せ　其角

人のいまをしまくはや桜海苔　ナハリ 杉峯

春雨にたゝき出しけりつくゝし　元志

陽炎やそれつきぬる古塚上　猗々

かけ縁ぬめや土もこれさぬあはにし　百歳

かけろふやほろほろ落る岸の砂　土芳

いとゆふのいとあそふ也虚木立　イカ 氷固

野馬に子ともあそはす狐かな　凡兆

かけろふや柴胡の原の薄曇　芭蕉

いとゆふに負けいのせ候猶　イカ 配力

狗脊の塵にえらるゝわらひ哉　嵐雪

彼岸まへさむさも一夜二夜哉　路通

ゑのはしや常れふまて涅槃像　野水

蔵並ふ裏は燕のかよひ道　凡兆

立さはく今や紀の人いせの磨　イカ 沢雉

春雨や屋ねの小草にも花咲ぬ　嵐虎

ころ中のま砂らく

まそらをや山の出る雲に花の門　猿雖

不性さやかき起されし春の雨　芭蕉

春雨や田蓑のしまの鯲賣　史邦

あらさらのおるや水ふかく昔　羽紅

泥亀や苗代水の畦つたひ　史邦

蟄よりゐる赤椿の竹や虫の巣　昌房

振舞や下座になほる去年の雛　去来

春風にこかすな雛の駕籠の衆　伊賀 荻子

桃柳くはりありくや女の子　羽紅

こゝらの若隠居ぬくもりし小すり　三川 烏巣

里人の縁蓑しまる田螺の礼　嵐推

蝶の来て一夜寝にけり葱のこほ　半残

紙帯切く白根か嶽をゆく衣　加賀山中 桃妖

いかのほりこゝにもすむや潦　伊賀 園風

日の影やこもくの上の親すゝめ　珎碩

蕣鶏ぬむ春のすゝめや椽の先　土芳

闇の夜や巣をまとはして鳴鵆　芭蕉

越より飛騨へ行とて籠のわたりのあやうきところ〳〵道もなき山路にさまよひて

鷲の巣の樟の枯枝に日は入ぬ　凡兆

うすゝまりえつる雲のしらみ合　伊賀 石口

子や待ん餘り雲雀の高あかり　杉風

ひはりなく中の拍子や雉子の声　芭蕉

芭蕉菴のつゝきを訪

菫草小鍋洗しあとやこれ　曲水

春風に節旅してつくへ歌さへあらぬ　江戸　山店

畫讃

山吹や宇治の焙炉の匂ふ時　芭蕉

白魚に流れ寄るにまきつく杭乃れ　車来

かくうきくやまひにふしたる男の
髪けつるにも枕をつけて云

さまをとらへて

笄もくしも昔やちり椿　羽紅

蝸牛あちらみせるつむき哉　伊賀　山本　望式

うくひすを魂にねむるか嬌柳　芭蕉

ちりまくりまさて進みてさけぶかな　伊賀　利雪

東叡山にあそぶ

小坊主や松にかくれて山さくら　其角

一枝は折ぬもわろし山桜　尚白

鶯のあそびもまるめるやま桜　九兆

生なから又しも枝のちる桜　文峯

夏の夜のそらつくは咲てもさかりかな　史邦

若葉よりそれてハ花の窓　千那

菖蒲の露をとゝむる

粽ゆふかた手にはさむ額髪　芭蕉

いかの国花垣の庄ハそのかみならの八重桜の料に附られけると云伝て

ふくん宿り納めて
一日とて〆ら紀元ちの子孫なや　日
古冥の墓二東武谷中ニ存して此家
為せ給ひて元年の後子の掘まうらぬ
墓のまへに桜植添侍るよし叫し
毎年初りさきつゝきてその桜もある
傍り子他の墓標さへ咲こされ給れた
まつりしや花咲小路の往還り　園鳳
ゑ人手おりしと花見ける　素来
ある僧の膝めし墓の数られ　九兆
浪人のやとかなく
菟鳥夜まろの夜あれなる　菟
報　羊残

胼きたられ宗中の中に入り　伊勢 長眉
ちる夏ゑやよしみな深く咲しこそ
大峯やよしのゝ奥の奥乃果　万古
道灌山ホの侍る
み湍や菊父子りの代を定めける　嵐董
源氏の絵をとゐて
桜手に夜ちる菊れまするこ　羽紅
庚午の歳家を饒て
饒まくりけりても花八ちりまほし　加州 北枝
これちりや御盃の櫃抑しも　九兆
海棠乃ちれを満らり夜の月
大和ぶり御乃しさ　江戸 吾船

草臥て宿かる比や藤の花　芭蕉
山鳥や躑躅よけ行尾の引り　探丸
やまつゝし海に見よとや夕日影　智月
兎角して卯花つぼむ淨土寺　山川
鶯のあるき〻そめてより山路かな　伊賀 式之
木曽塚
其春の石ともならず木曽の馬　乙州
春の夜はたれか初瀬の堂籠　曽良
望湖水惜春
行春を近江の人とおしみける　芭蕉
○
鳶の羽も刷ぬはつしぐれ　去来
一ふき風の木の葉しづまる　芭蕉
股引の朝からぬるゝ川こえて　凡兆
たぬきをおどす篠張の弓　史邦
まいら戸に蔦這かゝる宵の月　芭蕉
人にもくれず名物の梨　去来
ウ
かきなぐる墨絵おかしく秋暮て　史邦
はきごゝろよきめりやすの足袋　凡兆
何事も無言の内はしづかなり　去来
里見え初て午の貝ふく　芭蕉
ほつれたる去年のねござのしたゝるく　凡兆
芙蓉のはなのはらはらとちる　史邦
吸物は先出来されしすいぜんじ　芭蕉

三里あまりの道かゝえける　来
この春も盧同が男居なりにて　邦
さし木つきたる月の朧夜　兆
苔ながら花に並ぶる手水鉢　蕉
ひとり直りし今朝の腹だち　来
いちどきに二日の物も喰て置　兆
雪けにさむき嶋の北風　邦
火ともしに暮れば登る峯の寺　来
ほとゝぎす皆鳴仕舞たり　蕉
痩骨のまだ起直る力なき　兆
隣をかりて車引こむ　邦
うき人を枳殻垣よりくゞらせん　蕉
いまや別の刀さし出す　来
せはしげに櫛でかしらをかきちらし　兆
おもひ切たる死ぐるひ見よ　邦
青天に有明月の朝ぼらけ　蕉
湖水の秋の比良のはつ霜　来
柴の戸や蕎麦ぬすまれて歌をよむ　邦
ぬのこ着習ふ風の夕ぐれ　兆
押合て寝ては又立つかりまくら　蕉
たゝらの雲のまだ赤き空　来
一構鞦つくる窓のはな　兆
枇杷の古葉に木芽もえたつ　邦

去来九　芭蕉九　凡兆九

史邦九

市中ハ物のにほひや夏の月　凡兆
あつしあつしと門〳〵の聲　芭蕉
二番草取りも果さず穂に出て　去来
灰うちたゝくうるめ一枚　兆
此筋ハ銀も見しらず不自由さよ　蕉
たゞとひやうしに長き脇指　来
草村に蛙こはがる夕まぐれ　兆
蕗の芽とりに行燈ゆりけす　蕉
道心のおこりハ花のつぼむ時　来
能登の七尾の冬ハ住うき　兆
魚の骨しはぶる迄の老を見て　蕉
待人入し小御門の鎰　来
立かゝる屏風を倒す女子共　兆
湯殿ハ竹の簀子侘しき　蕉
茴香の実を吹落す夕嵐　来
僧やゝさむく寺にかへるか　兆
さる引の猿と世を経る秋の月　蕉
年に一斗の地子はかる也　来
名
五六本生木つけたる潴(ミヅタマリ)　兆
足袋ふみよごす黒ぼこの道　蕉
追たてゝ早き御馬の刀持　来
でつちが荷ふ水こぼしたり　兆

戸障子もむしろかこひの売屋敷　蕉
てんしやうまもりいつか色つく　来
こそ〳〵と草鞋を作る月夜さし　兆
蚤をふるひに起し初秋　蕉
そのまゝにころひ落たる升落　来
ゆかみて蓋のあはぬ半櫃　兆
草庵に暫く居ては打やふり　蕉
いのち嬉しき撰集のさた　来
さま〴〵に品かはりたる恋をして　兆
浮世の果は皆小町なり　蕉
なに故そ粥すするにも涙くみ　来
御留主となれは広き板敷　兆
手のひらに虱這はする花のかけ　蕉
かすみうこかぬ昼のねむたさ　来

凡兆十二　芭蕉十二　去来十二

灰汁桶の雫やみけりきり〴〵す　凡兆
あふらかすりて宵寝する秋　芭蕉
新畳敷ならしたる月かけに　野水
ならへて嬉し十のさかつき　去来
千代経へき物を様々子日して　芭蕉
鶯の音にたひら雪降る　凡兆
乗出して肱に余る春の駒　去来
摩耶か高根に雲のかゝれる　野水

ゆふめしにかますご喰へば風薫る　兆
蛭の口處をかきて氣味よき　蕉
ものおもひけふは忘れて休む日に　水
迎せはしき殿よりのふみ　来
金鍔と人によばるゝ身のやすさ　蕉
あつ風呂ずきの宵々の月　兆
町内の秋も更行明やしき　来
何を見るにも露ばかり也　水
花とちる身は西念が衣着て　蕉
木曾の酢茎に春も暮つゝ　兆
名
かへるやら山陰傳ふ四十から　水
柴さす家のむねをからげる　来

冬空のあれに成たる北颪　兆
旅の馳走に有明しをく　蕉
すさまじき女の智恵もはかなくて　来
何おもひ草狼のなく　水
夕月夜岡の萱ねの御廟守る　蕉
人もわすれしあかそぶの水　兆
うそつきに自慢いはせて遊ぶらん　水
又も大事の鮓を取出す　来
堤より田の青やぎていさぎよき　兆
加茂のやしろは能き社なり　蕉
物うりの尻声高く名乗すて　来
雨のやどりの無常迅速　水

昼ねふる青鷺の身のたふとさよ　蕉
しよろしよろ水に藺のそよくらん　兆
糸桜腹いつはいに咲にけり　来
春は三月曙のそら　水

凡兆 九　芭蕉 九　野水 九
去来 九

餞乙州東武行

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁　芭蕉
かさあたらしき春の曙　乙州
雲雀なく小田に土もつ比なれや　珍碩
しとぎ祝ふて下されにけり　素男

汗陽に虫歯かゝえて暮の月　州
二階の客はたゝれたるあき　蕉
放やるうづらの跡は見えもせず　男
稲の葉延の力なきかせ　碩
ほつしんの初にこゆる鈴鹿山　蕉
内蔵頭かと呼声はたれ　州
卯の刻の箕手に並ぶ小西方　珍
すゝきかる松乃志つか吹かゝり　男
萩の札すゝきの札によみなして　州
声よする百舌の一声　智月
懐に手をあたゝむる秋の月　凡兆
汐さだまらぬ外の海つら　州

鑓の柄に立すがりたる花の暮　去来

灰まきちらすからしなの跡　凡兆

名
春の日に仕舞てかへる経机　正秀

店屋物くふ供の手がはり　来

汗ぬぐひ端のしるしの紺の糸　半残

わかれせはしき雞乃下　土芳

大膽におもひくづれぬ恋をして　残

身はぬれ紙の取所なき　芳

小刀の蛤刃なる細工ばこ　残

棚に火ともす大年の夜　園風

こゝもとはおもふ便も須磨の浦　猿雖

むね打合せ着るものかさぬ　残

此夏もかなめをくゝる破扇　風

醤油ねさせてしばし月見る　雖

ウ
咳声の隣はちかき縁づたひ　芳

添へばそふほどこくめんな顔　風

形なき絵を習ひたる会津盆　嵐蘭

うす雪かゝる竹の割下駄　史邦

花に又ことしのつれも定らず　野水

雛の袂を染るはるかぜ　羽紅

芭蕉　三　乙刕　五　土芳　三
珍碩　三　園風　三　素男　三
猿雖　二　智月　一　嵐蘭　一
凡兆　二　史邦　一　去来　二

曲水 一　正秀 一　羽紅 一
半残 四

幻住菴記

芭蕉艸

石山の奥岩間のうしろに山有国分山と云そのかみ
国分寺の名を伝ふなるへし麓に細き流を渡りて翠
微に登る事三曲二百歩にして八幡宮たゝせたまふ神体
は弥陀の尊像とかや唯一の家には甚忌なる
事を両部光をやはらけ利益の塵を同しうし
たまふも又貴し日比は人の詣さりけれはいと
神さひ物しつかなる傍に住捨し草の戸有よもき
根笹軒をかこみ屋ねもり壁落て狐狸ふしとを
得たり幻住菴と云あるしの僧何かしは勇士菅沼
氏曲水子之伯父になん侍りしを今は八年計むかし
になりて正に幻住老人の名をのみ残せり予又市中
をさる事十年計にして五十年やゝちかき身は
蓑虫の蓑を失ひ蝸牛家を離れて奥羽
象潟の暑き日に面をこかし高すなこあゆみくるし
き北海の荒磯にきひすを破りて今歳湖水の
波に漂ふ鳰の浮巣の流とゝまるへき芦の
一本の陰たのもしく軒端茨あらため垣ね
結添なとして卯月の初いとかりそめに入し山の
やかて出しとさへおもひそみぬさすかに春の名残
も遠からすつゝし咲残り山藤松に懸て時鳥しはしは

るゝを猶富らし多は後さしよを来てきのつく
とかくしなとそろみ奥して涙呉楚東南
ましも身ハ蒲法師庵そ立り山あて東南みそえ
さらゝ人家よりさ西に海を南茎峯よりかゝし
水見海を浸して涼し日枝乃山比良のたかねより
空翠の色をつめて燃を樵さ硯によせて流る
茎と入りまゆかに小木繁の女梵帯の小田に早苗とる
高堂花のか夕寒乃みなみ雁乃声音寒
掛して寂寞と寒樹に中でもとより士峯
乃猜ふかよひて武蔵中に古き棲を掘かひいてられ田
中に古人をとりてさえぬ秋を出まち峯下芦腰と
いふ山家の里あり のとくらうちふりて綱代

よそよりよみ乃草葉ふ於は乃海あまりけり杉跳をひま
おろし今まと後の家に遠の汀乃松乃翻りて帶
乃同宿を於めて猿の便掛て名月破滄常まり
草まけてあひとも得て家の庵を結へる主翁徐倍
さ待てハおもしろし賊壁山の民と成く晨報よりて
をさ於け出し空山より風を折て鳴くさまし心さ於
あか庵を谷に住むるを深き肩かとくらくの宗を
傳く一炉の傍ゆとりしきさ昔住みし人の孫に
知るく住あし待りて長くさを抱すさも哀し
精修一閑を守りて夜の抱ありむへきこそ哀れいさゝか
まつりへりさ係を昭能は出さん山の僧正を加義の
甲斐何りし穀を出て時さは深く心のそつけりける

とある人をして額をこいとやすやすと筆を染て
幻住庵の三字を送らる頓て草庵の記念となしぬ
すべて山居といひ旅寝といひさる器たくはふべくも
なし木曽の檜笠越の菅蓑斗枕の上の柱に
懸たり昼ハまれまれとぶらふ人々に心を動しあるハ
宮守の翁里の男ども入来りて猪の稲
くひあらし兎の豆畑にかよふなど我聞しらぬ農談
日既山の端にかゝれば夜座静に月を待ては
影を伴ひ灯を取ては罔両に是非をこらす
かくいへばとてひたぶるに閑寂を好み山野に跡をかく
さむとにはあらずやゝ病身人に倦て世をいとひし
人に似たり倩年月の移こし拙き身の科を

おもふにある時ハ仕官懸命の地をうらやみ
一たび八仏籬祖室乃扉に入らむとせしもたどりなき
風雲に身をせめ花鳥に情を労して暫く
生涯のはかりことゝさへなれば終に無能無才に
して此一筋につながる楽天八五臓の神を破り
老杜八痩たり賢愚文質の等しからざるも
いづれか幻の栖ならずやと思ひ捨てふしぬ
先たのむ椎乃木もあり夏木立

題芭蕉翁国分山幻住庵記之後
何世無隠士以心隠為賢也何處無山
川風景因人美也間讀芭蕉翁幻住庵

記乃識其賢且知山川得其人而益美
矣可謂人与山川共相得焉廼作鄙章
一篇歌之曰
琶湖南兮國分嶺　古松欝兮緑陰清
茅屋竹椽纔数間　内有佳人獨養生
湍口錦繍輝山川　風景依稀入縁楽
此地自古冨勝覧　今日因君尚益栄
元禄庚午仲秋日　霞軒具艸

几右日記

時鳥脊中見てやる梺かな　曲水

入川さきぬ乃浪志ろ花のあひの山　卍水

鴈もしづかに聞はからびずや　去来

池山に五月雨そ一くさ　凡兆

軒ちかき岩梨折ぬ猿の声　千那

細脛のやすめ處や夏の山　珎碩

鶯の巣哉

ありふるは紙帳かけて送りけり　丈艸

いつさきて藪の笋や椀のふたも　里東

巣の鳥きえ也てけり乃森　乙州

霧晴を藤乃中の花つゝき　怒誰

多くしく家をねて匂ふ人ぞ　探志

五月雨の苫をかたむき元ゝ　元志

来つ　ゝさて明る藤かな　泥土

星あかり雅すしや風れ夕べ　史邦

月待や海を尻目に夕すゞみ　正秀

すゞしさは八雲が峯よりつゞく湖水　京人 柳陰

涼しさやとりつけたりむ雅この身　如行

　錦に兩そふなり

雅乃香をとらへて蝶や蝉の声　信濃 朴水

目の下や手洗に涼し家(?)原し　三ツ松井 市陸

　又かふかれ

雅の葉や早苗かけたに夕陰　牢残

麦の穂をむかふ[illegible]

一露こつれや[illegible]田のさゝく麦　之道

書立日

一夏のさかりや旅の[illegible]　長崎 魯町

夕立や楊柳の奥の一しきり　及肩

　界積綾掛

秋風や田の面にかくるよ[illegible]　尚白

　蝸[illegible]

きゝはたきあつめし[illegible]　小枝

雨履めて倦みいるの峯の[illegible]　木節

　白紙に書

縁まこれ葉露や萩の盛　播州 扇

稲の花これを佛の土産哉　智月

石山やしらで果てし[illegible]　朔江

楠の露やさらりてゆかむ[illegible]　昌房

里ちかく緑めし風乃なくつきに　何処

峰やいつし洛み行くりのさかる也　越人

越人へ向しく候合まく

蓮の実の供に飛入菴かれ　誉賞

明年猪ろ可句菴

春やあらしも暑んやの比を　嵐蘭

同夏

涼しさや此菴をさへ住捨し　曾良

跋

猿蓑者芭蕉翁滑稽之首韻也非比彼学
偏衒新奇頂冠受呂任其感物写興而已矣

洛下逸人凡兆去来随翁遊学探饒竹窓編写
凌節斯有富歳撰此集玩弄毫巴自謂絶
超観膝白衣者也於是四方唫友憧々往来或
千里寄書々中皆有佳句旦暮編月塗各程文
章于茲有毘仲騒壬不集録者索居鼠栖為難
通信且有麗倪婦人不琢磨者廉言細語為露
志雖金全甚域何棄甚人乎哉果分四季作六巻
故不遑広捜他家文林也維歳元禄四稔辛未
仲夏余掛錫於洛陽旅亭偶会兆来吟席見
需把此序文題卒撰直毫不揣拙陋幾一葉高
張有補乎詞海漁人云

風狂野衲

丈草謹書

正竹書之

續猿蓑

八九間空で雨降る柳かな　芭蕉
春のからすの畠ほる声　沾圃
初荷とる馬子もこのみの羽織きて　馬莧
内はどさつく晩乃吸もの　里圃
きのふから日和かたまる月の色　沾
狗脊かれて肌寒うなる　蕉
渋柿もことしは風に吹れたり　里
孫が跡とる祖父乃借銭　莧
脇指に替て通さるゝ旅刀　蕉
煤をしまへばはや餅の段　沾

約束の小鳥一さげ売にきて　莧
十里ばかりの余所へ出かゝる　里
笹の葉に小路埋ておもしろき　沾
あたらしう切たる門の書つけ　蕉
以りくゝ存は渋茶書螺坊主　里
やりと呼出されし家の道つれ　莧
首尾よくに約しし花の盛にあひて　蕉
見るまゝにそゝるに糸乃きへ口　沾
表からはつかり花乃桃古支　莧
伊勢乃下向にしゆかしきと逢　里
世話に小峯乃絆乃そへしと　沾
くりしつきしうその晴る書雲　蕉

禅寺に一日あそぶ砂の上　里
槻の角のくさしぬ要宛　莧
洗出しの牛に俵をそこふや　蕉
なまれぬ妬おそろしくきて内儀　沾
肉続に債金流のうちにふと　莧
籤乃篆乃えが基さ気し　里
ゆられて来く露も枝もむく蔓　沾
佳偲ちくる加ゝれり約　蕉
削やうに乏力坂乃秋の風　里
すゝめられ早られてこわれける　莧
引うく母の魂辞さるをさやうさ　蕉
そ川しと火入をおかしれ　沾
花をとや残しぬまゝの真てられて　莧
漆かしらのほとりかなゝのみ　里
雀（カラ）の字や揃ふて渡る鳥の影　馬莧
てりかゞの岸の拗りしろき舟　沾圃
立家を覚てそ流れハ秋まよく　里圃
姉川しなりをのぞく耳酒　莧
京上ゆる世慕ふ承れ又古人　沾
悲を去いて升の洗足　里
悔しきにゑみの一歩のころそ攻れ　莧
清状よみんてまさふかりまとる　沾

よまきこゑ華若れたる氣きつゝ久し　里
こゑふりしつる玉方乃宮　莧
行さきもなくてみてさき駒迎　沾
風にもまれかゝる稲の穂の月　里
座所秋の經緯に經りへて　莧
三味線乃むすひとて女房呼なり　沾
明ちかる伊勢の亭海の年籠て　里
舊は志しかれてかぬ一徳　莧
信屋幕も志めてさゝき花盛り　沾
春辭する筆乃緑纏　里
當乃名は八字を掃殘し　莧
志ぬぬ合点くさくなつて來る　沾

手しよ座くられ志とかく悪く　里
三勝穀質の若乃さゝむや　莧
けの寒ふこゆる茄子のもみ蔵へ　沾
あゝのしむ妻をまゐり刈てよ添　里
はしに幸の指圖を書し　莧
庭のおもの寄しく八淋しき　沾
錢うりくやすことつゞぬ小高　里
畀下して座よれ料理くふ　莧
肌入く秋ふかりよう袖月　沾
新ふころなし玉笹の家　里
汁盆ゐ實夏の母野あしく聞く　莧
まさし打しも相の座内　沾

杢のまれさ帷子時のにくい無　里
空て気味よき杉苗乃風　莧
花れうけ菜を三雑子の雛なり　沾
あし田の土乃かいてりけるに　里
以さゝ立意りきゆる光武　里圃
手を此まさ紀乃霊なりき乾　沾圃
大根のそこぬ去ふくれて　芭蕉
上下ともよ紙の葉の秋　馬莧
町切ふ月見の以の集め縁　沾
若うちつゝしと通る次　里

秀想徳の酒き此條極りて　莧
はらくれ條を根ゆるやく　沾
廻の雛に云をるけなかし　里
月利て空に上ハ屋をしなり　芭
蛉ゐ糸を踏河の此郷継とや　沾
まさ七川ふきたし残日の歓　里
草の葉ふまゐかしの有徒なまり　莧
係弱意つけ郷とりの雨　沾
うきさ豚を影しつれを浴る　里
みたる明をるうへ濡けてらそらし　莧
苫舟の花の中よりはつとでゝ　沾
柳の傍へ門をたてけり　里

百姓になりて世間も長閑さよ　莧
こまりを繕にかし作業　沾
濃柿の渋もつくし抱へし蚕　里
ろふのあかりさそふりもせぬ　莧
殊を遣ふ蘇の中の絡繹の変　沾
別を人がいひ出せば泣　里
火燵の火いけて勝手をしづまらせ　莧
一石婦こし、雁乃菜　浪
新しゝ、寅月の記る天気あ　里
仰のふか減のちうる安まさ　莧
肩新まえてしめそを嗅てゐる　沾
おりひのまくれ早稲て屋根ふく　里

手拂に鰯とやれて頭のさし　莧
ミ舟くるの気をとらて住ゐる　沾
芦の葉あて蹴鞠のきゝわけろい　里
寺のひけしる山原の東　莧
氷ゝうりさそかつえ苅りし波の鰹　沾
一面降てあるて冬の風　里

猿蓑にもれたる霜の松露哉　沾圃
月しろき宿もれて静なる星　芭蕉
水かくし彼の中よりなりて　支考
篠竹すしの家もろとも衰たれ　惟然

鷄のあくりみしやうく暮れ月　蕉
通りのめたゝきに又世くゝる秋　考
盆まへに一荷て志きる鮨の魚　然
三尺殿の小藤をむしとしかけり　蕉
聟をまちてみんしとせんを抑流　考
中宿よりの状の吉左太　我
数日乃日をとらへやう振舞けれ　蕉
一室殺戒の生臭きまゝつふる　考
きさんし菩薩の木の枇杷瓜　我
方丈の門ある夜の明の月　蕉
秋あらし留乃人のかけよけり　考
あやす光る湊乃小鰯　我

ひそく通る紀三井は花の咲かゝり　蕉
菅莚むしりよりして永き日　考
こち風の又西よりに北よりに　我
わうきよ膝を太夫なりしく　蕉
法師の内侯は文庫屋なる　考
喧嘩のさしもむさとせられぬ　然
大せつな日が二日ある暮れの鐘　蕉
雪かきわけし中乃ところ　考
東路の霜柳に生ける家　我
奥乃世並は近年の作　蕉
酒よりも肴のやすき月見て　考
赤鶏頭を庭の正面　我

定まらぬ娘の心のおもしろき　蕉
森汗のしめる身の暑さの夏　考
鳥籠をかかへておろす松の風　我
大工つかひの奥に喰ゆる　蕉
米搗もやすみしをて帰るべく　考
うつ身て市の中を押ゆく　進
此あたり後は花のけしきにて　我
鴨の池のまくぬけぬ春　考

今宵賦

野盤子
支考

今宵は六月十六日のそらみづにかよひ、月は東方の
礼山にかかりて、宿ある人々湖水の秋をたのしむこれを

と宵の間のあつさひそかに、きよりすゞ風の席をとくべくね
ことなし、磯にこそはるべく、これは湖水に捨て舟を
思ひ出しとおりふし草庵にかよりて、翁人を待ちて人々を
興せしめむとくに、ある人は竹尺、あるは杖をもて兵乃衆をくり
とりしあへる畔の月の舟をとひ舟の奥をさぐる浦
出るやうに人々を待ちける、かの曲は深川の草庵に侍る
乃事秋をうかべて、しかして人は内をいひ、あるは心を
添へて侍りし山家に父母の古郷をおもひ洛乃
後は山に旅寝して加茂祇園乃涼みをもよ
それよりてや、けふは秋をむすびなと思ひ侍る
湖水の勝景にまさるものやと、三日里に暑を渡りて
愛する草鞋乃旅をとゞむ、今宵七月と芭蕉庵氏をあるし

とりて俳あり俳あり俳ありて俳に似るもの一ツなし
その文乃はゐかいものを加川に岸まで小杉をひきよせる
かくし添りし○ハさゝえつゝ川乃川味なうして人まありあふ
すまへしたり歌学なくしかりし人くみ乃さしむきまで
まさてありくかされくおのつからよろこへる及人乃歌らう
うちゐて出立てへ此歌仙て月もかけてかきりなるやさしくて
奥義ある跡を此便に古さしの道てゝ心さしやされし
ゝ支考も以皆乃方に作とらる求て附句乃はなて
むかへまつたると相妙になりたるしれは漸かの私ある
乃ためをそらしくかうちつれて此くゝ此はうちひまおはし
つゝ此去年のとむ月ハ夏のかく明まへいはさゝき
られ今宵乃無宴何をはうらさぬなんどいふて酔て

扨つるものあつめ八町計盃乃数まちとのまかり人を
たゝずみてあれあらぬ

夏の夜や崩て明し冷し物　芭蕉
露をちらして蓮乃縁先　曲翠
鶯はいつもの籔に音を入て　臥高
古き革籠に反故おし込　惟然
月影の雪もちらつく雲乃たえま　支考
たまりかねく跡をふる篤かな　芭蕉
猿を拵嶋の分へ追よかし　游刀
山から石に名を書くもんし　高
飯櫃なる面桶にはさむ火打鎌　我

いそて工夫をこらす照降　老
あれたるは寺子あつめて椽の雪　蕪
持佛のうへに夕日さし込　樂
平城に菜を蒔し人ぞ泣　吉
秋風は門の居風呂　我
馬引て綰ひ行る月の影　几
尾張てつきしあまの名はある　蕪
餘所好乃としの花にあはれて　樂
正月ころの襟もまださん　几
春風は荒吹の溝のうすれ也　我
藪のうら村へぬけるうら道　老
喰ひかねぬ聟も男も口きゝく　蕪

何その時は山伏に成ん　樂
笹たゝきを持て射る人みな　几
巌しく八ある卯月朔　末　蕪
肩く往来する川矢来の町　老
縁乃月照る雪の氣色哉　我
吞こゝろ子ともせぬ酒のうま過　樂
見かへらの〇を添へ来つくる　几
射に射し文字ある月の朝　蕪
ころころとありく盆の上鶺鴒　老
思ひ詰る四条の角乃河原町　我
なる胸をあ　くる表一周　愛
今乃為に綿を見くらべ棉の上　几

大キな鐘はさんにかゝゆる　維然

旦那の花も庇おしよせて　支考

勝ちけつゝしの桃の下　ゐる

春之部

花　桜

温石はあつからぬ氷東や桜　其角

寝ひにはまた又手の内をはい桜　芭蕉

親に似ぬ子の白かゝるかゝ哉　洞木

ちる日や木の股くる花の山　丈州

角いれし人をかしらや花の友　洒堂

花散て行つかる新の雲ときゝ哉　露沾

富貴なる酒屋にあそびて文君か

九寸も酔のまきれを思ひすてられ

酒部屋に琴の音きかせよ宵の花　惟然

賭にして降出されけり花の宿　支考

人の手もかしく我観し桜　沾徳

うつる日や世の中の花の面　猿雖

さかりより見よおて下女中　陽和

見る所ありとは一夜さかりかな　乙州

咲ぬれも知らしきたる老木哉　李由

京の庄やかりて見せたる桜　沾荷

二の膳やさ丸吹込む鯛の鼻　子珊

嚢史は虫方に出つくし桜哉　卓袋

田家

菖蒲乃名もしらんや海桜　李里

咲かゝる花や飯米も十石　桃首

山門は花をのみしる事の雪うり　一桐

なき花まの根やあらはれて花の影　如雪

花の笠とまりて似合ぬ人を随　甚宵

をれやれ垂乃家も花をたのもし　一聲

めりたれ咲の声あや都の花　阜袋

一日もそれ見のあるやし見れ寺　沾圃

八声へ橘ものも絶る声なき葉かな　仝

若葉

澤緑や若葉に御井かゝり　嵐雪

象潟の姉や加茂姆の花の家の形　幽賞

夕波乃形まきてゆるかるむ乃　孤屋

一顔歟の牡丹よりきらぬ葉かな　尾頭

梅　附新

なつかしや家ゝの入月と梅　芭蕉

おくさしきや大黒柏もむかしの花　北水

守梅乃あらへ葉なり梅杏　甚閑

里坊の梅まくや雪に見るの花　昌房

枝入や梅のまがきに藤のたり　良品

編結の庵さく梅のさかりかな　ゐ言

あかしにし紀取るを廉まとへた梅花　万乎

藁屋や梅の袖もうれ下総の紀　奠日

ちらし椀やたゞしうるに宮めぐりあさなり　千川
鳥の巣や梅のみ身ひとつかくて鳴ん
　天神のやしろに消く　大舟
当にほけと引るゝや梅乃艶き八　遊糸
そむくの獺のもりや梅柳　千那
付しもきのみちらすら川やなき　芸虎
ちらつくを数へちらりや古柳　江東 李由
ま柳のまつられてまでするは曲　九白
鯖をうけてゐる業通る柳かな　巴丈
ろ鶯
　附臭
鶯に長刀かゝる承麋（ゲシ）ゝ甫　其角
うくひすや娘銭の風呂あかり　史邦

鶯に手もと休めむながしもと　智月
鶯や柳のうしろ藪の前　芭蕉
獺の塵も出しけと雛の祭かな　去来
麦めしや蓬はさまん雛子嫁　洒堂
駒鳥の月のさゆるや鶴の杉かな　傘下
こゝ角の青に似合しき白紙屋　長虹
燕や田を打くへ馬のあと　野童
巣作や身をと押しておや燕　少年 峯嵐
雀子や婦よりもらひし雛の櫛　槐市
蠅うちふるのぞ窓の子雛外　何瓢
川鴨や東風につれての夜啼之
　芳野乃河乃瀬　沾圃

鮎乃子のなすさ流し淵の色　士芳

かけろふをおよぎちらしつく小鮎かな　圃水

しら魚の一かたまりや汐ながれ　子珊

白魚のしらむ時も清き哉し　山蜂

深川にあそびて

しら魚をとらひ寄る四手の角　支角

春草

なくりても若草縁や春の色　正秀

若草や松ふつけされ畦の石　此筋

春乃水やしらつれの草かくれ之　居 羽紅

川淀や流をやらと動くあしの角　猿雖

舞乃あしへや土筆の長さうし　闇指

春雨や桜の花によめなきさ　東来

若草の道もよふめのも花あさき　荒雀

流るうつらひ若されたもとれかな　馬莧

踏まれたる土堤の切目や蘆乃塔　拙侯

猫の子の形に花さく土大根　乃龍

早蕨や茎より山乃柏子　正秀

三つ葉の乃みけいに肥る三葉かな　夕可

日乃影子猫の机もれ猫活箸かな　一桐

蒲公英やさくらのさきに花さかり　圃箔

猫恋　附胡蝶

永新や肩またぬ残帰猫乃恋　採丸

うかれ恋てや猫の塗倉　支考

おりひろけてそは思ひあけける丹楢かな　三ノ　巳百

白日さしける也

ひきかりても翅に動く胡蝶かな　柳梅

衣更着のうきひやちぎれ蝶の翅　椎然

蝶の舞ひかつる柱にうしろくな　園桔

風吹ば舞の出来る小蝶かな　キ初　金さ

長き寝して花にまかせりしお胡蝶かな　雪窓

春鹿

猶おとしりても広く出て鹿の角　沢雉

春耕

梅の香ふるさあてまさくる麻　木芸

苗札や並路をそはれて月影　比節

千刈乃田をかへしあくる雛よん人　一鷺

桃　附椿

白桃や志川くも流れ行の文　桃隣

今様をすさ筆たり毛乃花　介我

桜の上乃毛の花　雪芝

梅さくのこ中をあゆるの花　氷鴎

花さそふ桃や舞の眼躍　甚角

江東乃李由か祖父乃隠居乃法名を
桃のく舞文殿のかつ白小径陀の光明と　いふなるを

小服絹にも光をやくせつべき　角上

椿も枯らく花咲椿の郷　残香

あみくつろや椿の花その咒　洲木

ちつま桂あまりもろきれ績て一々分　卅城

款冬　附蹴鞠

山吹や垣に干されし菅一手　園指

田家の人に對して

山吹も散るよ祭れ鯛なます　洒堂

鞠おこれ落しの桃や蛙のなるさ　雪芝

藪鳴や穂麦に咲く蕎乃花　荊口

麦月

山乃端をちりく良なりまさ比月　長崎 魯町

麦雨　附麦雪鮭

拙よりさいふの飛せんや麦乃西　荊口

浅さへ洞子合ハり麦乃雨　乃我

麦鞠や慶九あつる甚座ところ　游刀

なかくしるるる武江の旅店を訪ね乃寺

麦畠や秋くれ川ろしらむ本　支考

うるあふや麦穂うつろに郷路乃雄　桃首

淡あをや西え追くるれ比丘　風麦

収穫くや雉乃飛る石乃道　風睦

汐干

乃あうき帆乃淡路も女汐干哉　去来

晩月よ富士見新家や汐干かな　園指

新麦

虫かくりやあまれ動る去かな　許六

若粋やまくと紀越する桐乃苗　風睦

寒からこ乃松のそこらや花そより　土芳
月けふや巌ヌ腰乃掛ちかく　配力
小菊苑たふるんめそつれや那須の家　万手
菱つ舞う稲荷や神楽や市の中　菅蘇
ちみ女見えり衣かくれぬや八ヶ条　均水
春乃月やし筆おもは乃中に此小室哉　正秀
三叉乃鯉くめ戯そよけ池　仙化
引鳥外中にま生田螺より　支辰
三内まで
鵆羽を白洲より此名残り　支考
峯臣
草の戸やあふひらりきき萍氷　少年 武仙

蓮道ハ手のうすし此土所々　百峯
菅やし離る見るその里にぞ義　尚白
蓮世草藁のうちふつひらし螺乃貝　圓落
舟すの数わつりしや蟲を娼　山峰
行ふなふ衣裳を顛倒まつる
手きを文乃文ヌ書き我し侍れて
えりや我ふり代れのこしも表　千川
人もこぬ春や鏡乃くし此橋　芭蕉
明る春のかのあふられしまあろつあれ　甚角
楪の世阿弥まつりや春かぞ　嵐雪
菜の花や十九丈まつひて松の法　去来
芳ふ橋つるする羽鳴きこう耶　太芳

そら川すゞしやよく化て見る心細法　風睛
　冬年孫をまつけふ
元日やまつ行方の北斗乃苑　猿雖
子ともちやまつ川凪や花ひらき　蔦葉
脊まうし初の鶴を見せ冬そ　歌音
歯朶乃葉にいれ入る包尾花鯛乃そり　耕雪
鯱乃箕負のなを初日かな　龙柳
そら川すゞしや年の若様の日比丘尼　前川
枇杷乃花乃ほし作くし初家　斜嶺
世乃花や鶯とあられ若菜　山蜂
湯ひらや大かみさけの初日影　任行
元日や弟に見せる猫乃器　竹戸

家やちらつくに続くすゑよりり　是楽
鶏鶯や餅すとちるの喜　沾圃
色かしの夕の日ゆかりや鶴ひさき　圃角

夏之部

郭公

暁乃雹をさそふやほとゝきす　其角
語るまんれ啼や湖のさし渦　丈艸
声しく須で何をあれかほとゝきす　為良
蜀魄啼ぬ夜白し朝熊山　支考
啼声の名やせりかゝほとゝきす　如雪
燕の巣守しむ宿やほとゝきす　芳女

淀よりも勢田はあつけろし子規　
此句ハ石山の麓にて瞑想の吟して通りけるとや

郭公かさゝの森や中やどり　治圃

木附草花

橙や月にこほるゝ夕あかね　関指

里しゝの姿かはりぬ夕あらし　毋荻

園中　二句

此中乃古木をいつれ柳乃花　此筋

手切のきれも柳の花ふさ　千川

姫百合や上よりさかる蛛の糸　素我

題山家之百合

赤しほやうまき孫を飾る百合の花　支考

山の名をはなれて咲や杜若　尾頭

冷汁に出くはしけり杜若　治圃

手のとゝく限り際されかきつはた　イカ 呂多猿

夏菊や茄子の花は先へさく　拙候

さし銭屋乃花ゟ奥

昼かほや日さくれても花盛　治圃

夕顔や酔てかほ出す窓の穴　芭蕉

夕かほや裸ておきて夜寒さ　古人 嵐蘭

藻の花をちらしよせけり入江汐　沙香

藺乃花に飛のく水の滴かな　此筋

蓮の葉やゆりて見事に離れ　白雪

客あるし隣は蓮の蝿おはん　言水

瓜

朝露によごれて涼し瓜の土　芭蕉

那ぬらすや種は入ても守りくれ かくれん　至暁

条あまる餞ぞ出されぬ牡丹哉　風弦

早苗

雨入や多羽乃田植乃隠れ中　長崎 卯七

早乙女に結んでやらん笠の紐　園指

ぬかるみの種おくれる早苗哉　魚日

田植哥よそてなる氣の調ひ出し　李由

一田づゝ行めぐりてや水の音　少枝

里の子が燕握る早苗かな　支考

蛍

蛍火の畑をちらでかゝるかな　許六

三日月に草の蛍は明にけり　盤荻

納涼

涼しさや竹握りたる夜番の手　半残

草花萬や庭草むらの夕涼　惟然

涼川の菴に寄して

あせ流ぬや風吹うちの朝涼　史邦

涼しさやかゝる蘇鉄の縄手ごし　土芳

石ずりや裏門明て夕涼　牡年

涼しさに牛の尾振て川の中　万乎

漫興　三句

腰かけて中に涼しき階子かな　洒堂

涼しさや椽より足をぶらさげる　支考

生鯵を縁からなくる涼かな　素芝

たせん箱を貫屋まちきて

涼風も出来しさ磯のこはれ外　游刀

川そひしき中をぬけゆく涼かな　仝

立のく人にまぎれて涼みかな　去来

黙礼にこまる涼や石の上　正秀

職人の帷子きたる夕すゞみ　土芳

涼しさや一重羽織の風ふくみ　我眉

夜涼やむかふの人を月かさす　里圃

盤友

かさなるや照りかさましら屋の隅　丹荻

暑なる又姿のおこりの暑かな　万乎

藪医者の暑さ紛れしは差へ侍る

実にもと八清く療治の暑かな　正秀

乳草の肉のあつさや梅法かひ　乙州

煤さゝる日蓋はつし庭所　怒風

藪中に鍋も去ぬ暑かな　尾張 素覧

草の戸や暑を月に見えくれ　亦峰

はつむ日や扇をたさんおもそぞ　卮谷

積あけて暑さしのぐや…　卓袋

秋ちかき艶も秋のはつさかな　里東

立よれは川ちかやの暑かな　沾圃

竹乃子

筍まぬかれく岸乃崩るゝ那　可誠

茂り行や畑乃出る庫裏見窓　曲翠

五月雨　附夕立

志ハ譬やまくもなうれ黴雨の中　翁 不玉

さみだれや蠶煩ふ桑乃畑　芭蕉

五月雨や踵よごれぬ磯つたひ　沾圃

夕立にさし合たり日傘　探候

白雨や蓮乃葉たゝく池乃芦　苔蘇

夕立やちらしかける竹の陰　曉鳥

ゆふたちに傘かる家やま一町　園水

蝉

白雨や中戻りして蝉乃聲　正秀

きのふきて啼くあり乃蝉の聲　胡故

裳乃蝉ほしき聲やなつき聲　乙州

蝉啼やぬの織る窓の音なりて
こりと　曉鳥

蛍乃目や瀬をわたるそりなき　兼拾

雑夏

豆植し手乃動きや園〻の那　杉風

虫乃喰ふ夏菜と知しや寺の畑　荊口

夏瘦も秘くのひの中のひとつ之　イセ 如真

川猟よいてく

志ら鷺や夏かゝく無て杼鮠　文鳥

「笑茶に心ちら人参や園の暮蘇　萬雫
夕闇を抓さるも志らや酒を干し　永隣
翁なきこゝろは老母とやさしひて
魚洗ふ葉もあれ涼しちを　百竟
梅雨きるゝ筑かさむく日乃面　重要
沢瀉や道付かゆる雨のあと　武孝
蝸牛流の川岸乃そゝきけり　水鷗
晋乃渕明をとらしむ
窓形に昼寝乃臺や簟　千歳
飛こんで帷子かける昼寝哉　唯然
多病のうちに老乃ならすをまきを
おそくよまる香ふに夏日の納涼ハ
扇面にして世よふ伝へる
帷子乃縁をひきやれし錢五百　支考

秋之部

名月

名月は梦幕の音や田乃くもる
名月の花かと見えて棉畠　老翁
ことしハ伊賀の山中にして名月の夜この句
をなしけるにそれが見えつる形かんと語り
しれさりけるを今しれ月と手川かる稲のたぐひハ
ちれまりりわし只ある人ハ知困者この事也
園経のやうしのゑやりかくされし　梦秋ちく當横り

あらかりしく平田瀰しと見えつゝさるを老杜が
峡雲のかゝりと云事もなきにあらずし
其の次乃棉なとけふ葉々繁みして心を分
やかれの外に今乃このむ所乃一節に役あん
月乃ひかりのさかへなるひかりと花くれ
共にしわりひやられハ花ほ清香あり月
に陰ありて是も詩哥のうへをのれ後にハ
前ハ寂寞を心とし後ハ風無とせり
そうすれ昔こゝろ何を是非をそうるを
なさむと後乃人々か俳ある也

名月乃海より冷る田薫ら那　　洒堂

支考評

明月や雨よかりし北ハ飯屋の月　　如行
そのしの乃根さらん月見かな　　露沾
ぬれ川わたるハ世さかひやせん月の月　　智月
名月や長屋の陰を人の行　　園指
明月や文科よりの中より出　　涼菟
明月や灰吹捨る陰もなし　　不玉
中切乃梨に気のつく月見かな　　砂刀
名月や草のくらみに白き花　　尤拥
明月や遠見の松に人もなし　　園風
松むら気もなくて名月哉　　山鋒
明月や鳥寝ぬ里ハ門をあけん　　凡兆
名月や四五人乗し艜ぬ縁　　露笑

庵の戸もあけて青乃月も内てみむ　宇文

明月まかられし
星崎に誘はれて
以勢乃山田にありて故郷の庵をおもひ
言ふ財

泥芹

二見まて庵地たつぬる月見かな　支考

芥子蒔し畑まて行ん月見かな　空牙

柳の名此子卯と先に月見かな　如真

山鳥のちりつゝと撞ぬや峯の月　宗比

名月や里乃にほひ乃青手紫　木枝

場に飛く月見なかりしや菜桟　利合

明月や鰐のしゆき女中君　丹楓

明るや何もひろかれ表の道　野荻

飛入乃客に手をとられ月見かな　正秀

淀川のほとりを見とをりして

舟川乃岸かりよけて月見かな　丈草

傾く月乃月に届しや定飛脚　示桃

家の上老舎にかゝるまゝありて七文字をたてまつる

秋しくて侍りしをおもひもとく

蟋蟀を闇にのねるや川上乃月　沾圃

家おきさく月入あとや塀の中　馬莧

暮うつり月まて曇ぬ桁かな　里東

月影や海乃音聞く長廊下　牧童

深川の末五本松といふ所に船をさして

川上とこの川しもや月の友　芭蕉

十六夜をわすれし園乃秋かな　仝

いさよひは闇のうちなりきくの花　森雄

七夕

文月や手田の上のあまの河　惟然

星合をみあかく調れ秋うしれ　涼葉

船形りの雲きたしくやかりの秋　東湖

夜ありさをいうなる針のよみにき　沾圃

秋風や薫姫乃園　もち　乙州

立秋

粟ぬかや庭に俵を秋の秋　鹿川

秋たつや中に吹たる雲の峯　尤次

穐草

秋の水見れ透通れ桔梗かな　柳梅

細やかにもおもしぬ桔梗のおたかな　路友

女郎花ねむりぬ馬骨の姿かな　沼子

そこなきし秋坂の秋にまれ船　言先

一節まで花びまちらし畑芝　鳥栗

弓園　さるのなれや萩さらし海　支浪

猶芭蕉之庵

百合は芭芙蓉を綾の今かな　凡麦

ゆよ姫のたてやる席しはすみの花　史邦

桔のぼるは手の挽うし秋花　万乎

秋風や庵の茶の飯なきをあらし　芭蕉

秋風の吹わたりけりしぬ百敷かな　至暁

おつしや雨戸にさはる萩の音　雪芝
萎れ葉ふや跡しれ動く秋の風　荷兮
山人乃昼寝をしばれ蔦かつら　加州山中 桃妖
風毎に長くなり行く蔦かつら　杖下

朝かほ

朝かほの蕾かぞへる宿の秋　里尼
あさかほの這ふて落けり柳かな　園指
朝かほは影ちるまで綿の舟　風麦
朝顔は志ほれし人や綿帽子　其角

稲負鳥

きなうし此儀に經もむかしとなれ　女 可南
竈するや影を飛行くやくらの棚　北枝

火乃消て朧にまよふ虫乃声　正秀
秋乃夜や夢と鼾とききくらし　水鶏
こゝの虫や形に似合し肉の気　杜若
鶺鴒や何乃味ある筆乃先　探丸
蟷螂や腹をひやせる石の上　葛男
蓮の実に押されて蝉の声　木峯
ぬけがらにならびてしぬる秋のせみ　丈草
房々にゆられ行く浦乃苫屋外　馬莧
鶺鴒や走りて行白川原　求固
粟の穂を見あぐる時や啼鶉　支考
老乃名はありとも知らで四十雀　芭蕉

秋風

秋かぜや二番たちこの旅さきに　游刀

雀子乃髭もくろむや秋の風　式之

ゆかりとかりあらしの秋乃風　文考

松乃葉や細きにも似る秋の姿　風國

そのつぎの草乃さかへと舞かふ　園燕

ぬれもろや舞なまひかふちら雲　九言

あれして来た海乃舞かな　猿雖

稲妻

ひとりおく露を抱きこし稲乃殿　一東

稲妻や雲にへだつる沖の上　宗比

咲花のや稲つまこぼるゝ雲乃端　土芳

稲つまや闇乃方行五位の聲　芭蕉

木實　附菌

團栗乃落て飛ゆく石かとけ　游音

炭焼に柿樹たのむ伐り給　去来

秋風や日和かはりし柿の笑　洒堂

泥あしく茎帯とりて榎を引　冬家

谷川茸や據ても濱さ一さかり　沾圃

伊賀乃山中に而奥の
早松縁としつらいて

松茸やかぶれたほとは松の形　惟然

松茸やしらぬ木の葉のへばりつく　芭蕉

楓

後屋乃塀にすれたり村紅葉　小鯉

廉

尻もやれて秋乃廉や風の音　風睡

藤かつらに廉掛るゝ暇もなし　一酌

農業

起しをし人も通りり蕎麦の花　車庸

本ゆたに狸おむうつ穂麦かな　貫山

さし添ふてけるとも小くらし暗の稲　如雪

伊勢乃斗従に山家をとはれて

蕎麦ハまた花てもてなす山路哉　芭蕉

早稲刈て落つかぬや小百姓　乃龍

山雀乃やどりに帰る家乃稲　斗従

振りよさに河原鶸ある小菜畠　支考

一ゆい乃もや芋乃もとんと刈　仝

朋友なり嫁よあつし蕎麦のくき　惟然

百ゆうてかしうく撫て磨かゝし　木因

大師河原にあそびて桜頃よみあつて

殊に遊ひて

その清の香や西瓜上戸乃花乃顔　沾圃

菊

公翁草二百十日も恙なし　蒿下

またはしこやかも白菊乃玉牡丹　泗子

粛入来綿乃もに定まし菊乃花　支考

歌番匠

すゞしさやかゝる山路乃翠の香　几峯

借りかけし庵の障子や人乃影　丈草

暮秋

唐沢や脊骨に響る秋乃声　卍水

行秋を鼓弓乃糸の恨かな　飛州

行秋や手をひろげたる栗のいが　芭蕉

雑秋

五六十海老たゝきても鰒一つ　之乙

栗かしき身の置所なし松乃中　圃友

あれ寺の門に遠つく秋の外　畦止

鍜る鍛冶や家の付出る秋の雨　口友

身ほとりは春秋こそめて朝つゆ　萩子

見る秋や稲こく家乃笑ひ声　万平

柳乃葉に埃かそ鶯乃声　素門 宗波

おのれ鳥の宅に戦貴もの笛鼓をうちへて鉄から声を画く葉甚の壁にかけたりまとれ生死乃五八われもと八この秋ひとの珠なんやかの髑髏を枕として終に元そくをりしさるも只この生死をともさるゝとのこ

稲つ雨やうれ乃要ころゝ　落乃穂

宗紙

冬之部

時雨　附霰

この比の垣の結目やはつ時雨　野坡

しくれ来て又松風の跡をのみ　少杖

けふばかり人も年よれ初時雨　芭蕉

一時雨まてしくれて日和哉　素沼

初しくれ小鍋の芋乃煮加減　乙荒

平押す又反田くるる時雨哉　野明

宗鑑やいとしくれ乃茂廻りし　園指

桃葉もちる芳野の初時雨　空牙

完継乃初しくれ引込時雨哉　為有

定まるや鐘まてする一しくれ　鷄口

不小面く香炉をめくれ時雨かな　野萩

柳色む日和もなしや一時雨　宗川

こゝろまよりしくれく里の寝覚哉　里圃

浮雲をとらへのゆくゑまゝなしくれの
月影のりよりあらたなり時雨　佑園

沖為乃秋日くりかれ時雨哉　小鯢

ときわ木や犬の土かく爪の跡
飛そりきむや一葉しれ紅葉の果　支考

元禄辛酉之初冬九日素堂

菊園之遊

重陽の宴を神無月のけふにまうけ
侍りて其花は少もやさしめくしも

やつれ菊花ひらく時刻すら陽と
以て露を含みふくみて展す陽
のあたりもさびしくもあしらひを様
秋菊と称して人くとすゝめれ
たるもまたうつりぬ

菊の香や庭に切れたる履乃底　芭蕉

柚乃色や起あがりたる菊の露　其角

菊乃気味ふかき境や藪乃中　桃隣

八専乃雨やあつまる菊の露　沾圃

何魚乃かざしに置ん菊乃枝　芳良

菊畠客も円居をゆるしけり　乃竟

紫蘂乃隠士サ弦乃琴しき弦しを

ちられ菊も鶏乃大なる人ろうとむさ
ぼり遊化もうするに及びし今菊
をやまひくさのうちにすれとも
以ても家に菊作りて琴弾しみ
くるふ作しれやよそて人見竹洞老人
書琴を送られしより是を夕
あし気を移りしてあるに契
ふかき醜きあるを風よきく余
せて月しかくうつりぬ

うつしせぬ琴や似たぬ菊の友　素堂

草附木

手伝や強塚うつれし日の北遥る　曲翠

なほ清く咲や葉がちの水仙花　水圃

雪乃花のこほれや藪屋しき　惟然

范蠡が趙南の方に居なれる

山家集乃題にならふ

一露もこぼさぬ菊乃氷かな　支哉

山茶花を元より開く帰り花　車庸

冬梅乃ひらく向ふや冬牡丹　土芳

山茶花も落てや霜の数ヶ枝　蓑笠

木葉　附冬枯　凩

ちりかゝりし木乃葉ちらぬ松堂の数　沾佶

ほろくて江の鯛之しむ落葉かな　露沾

冬川や木の葉ではさむ岩のゆる　惟然

楢葉より見えざりしよき木乃葉かな　朴風

木枯坊宗比乃庵をとゞろ行て

こゝろよりせんそれくさる落葉かな　イセ 一道

枯そゝく霜木ならぬとや葉と逐し　杉風

牛乃いゝる枯野の中に残かな　泉流

みな枯よ古年きてこゝろ安かし　乃彩

草枯よ手につくこゝぬ鴫も所り　利牛

舟を枯くのこれおもし鵆の首　支考

木がらしや色手も見えぬ数せんし　智月

風や脊中ふりし牛乃努力　凡介

木枯や刈田乃畔乃鉄気かな　惟我

こがらしや葉ゆれちる牛の角　塵生

夷講

ゑひす講酢売に袴着せけり　芭蕉

恵比須講鶴も鴨に成にけり　利合

鳥　附いを

乃せ乃海をとこく

塵溝に角しぬ身も哀し浦衛　向空

退かけく竈よころ人手まる汁　蔦雫

小夜ちとり庚申まちの舟屋敷　丈草

入海や碇の釜に帰る鴨　嵐蘭

鸂鶒もこゝろにてぬくし鴨の足　芭蕉

こ川鴨を大巡らせる流しこ入　衣木

汲汲まこゝろ入るに生海鼠　元人 利空

うらくと海月に見るなかの上に　車庸

凡しと遊や子持ひとめ乃水　岱水

一塩に初白魚や雪比前　杉風

かくぬ川や後とあらて浮藪　松候

杜夫魚と河豚の大さよく水上に浮ふ

越乃川まのとあるうおすの

冬月　附衾

岭ことのや門こりありく冬乃月　里圃

あし猫乃かけ出れ新や冬の月　丈草

何ろすも寐入すく衾の紙衾　小春

手仏や門を出れそ江乃肉衣　支考

埋火

埋火や壁には客の影法師　芭蕉

侘しさに夜着を纏ふる子猫哉　少年 桃先

自由さや内を追廻す雄　洞木

雪

初雪や門に橋あり夕間暮　其角

朝ごとや肉も雪見き酒の味　仝

雪あしき我心のうちふるさむさに　夕菜

鷺家をとをさかるゝ雪の宿　祐甫

雪折やきこへぬ人の京の奥　葛齋

姉が川子も草鞋をはやく雪　支考

行空や雪降るすさ俵　圍吟

ちるはなの雪見や日枝の茶後　丈草

髭剃も冷まりし雪の北窓の日　陽和

停留大和にさける雪の花　死刀

神楽

雨神楽に萬嚼さる雪の夜ごとに　史邦

神楽さとよ

今朝やしはしる鈍ける神楽哉　浴水

海さしぬ干鮭売をすゝめるの　馬莧

脛入の門も通りの神楽さき　許六

根を送りつらん神楽哉　浩圍

煤掃　附録つかよ

煤はきや鼠追込黄楊の井　孫香

煤はきやあしあしあらふとる紙　萬逸

才覚手帳乃かしや煤ごもり　可芝

煤とりやわすれて出る御神和(?)　一閒(?)

煤掃や打置一枚踏くさく　惟我

餅つきや火をかいてれ男ぶり(?)　岱水

節季候さやおころのさる鏡のよや(?)　嵐蘭

もち搗乃手傳ひさるや小山伏　馬佛

寒声(?)　歳日(?)　附長季は　名記(?)

こ頃返し(?)もの師走の市のさ日和(?)　蓼民(?)

門松やすきて来ての渋紙髪(?)　里東

賣てもとりても同じ年の暮(?)　草士

旅もすのなりまれやとしの暮(?)　車来

大年や親子ともに精出して(?)　万平

袴きぬ舞入れもありて年の暮(?)　李由

年忘れ浴を呼けて羽織よの(?)　丘角

あてなしに立ちの師走かな(?)　正秀

引張に一時ほしのやとしの暮(?)　荻子

桶の輪乃きれかかりしぞの暮(?)　猿雛

天鵞毛乃つまみきりしに年の暮　惟然

淡薪(?)は革を持せてとしの暮

此句は圖目呂丸(?)の羽くろよりきは
のなるとて伊勢なもかくて待つ
られはそのとしの暮うるさき念い(?)
深しては人と云われし(?)

盆人にまじりて歌もあり年のくれ　芭蕉

余所に鳴くとんびの声は年忘　支考

衛士に勝所や来ぬ年の中　土芳

苔李子はや弱りて鳴る藪の中　尚白

若菜かなの拍子をぬかれ鳴庭に　少年　桃後

哉屠蘇楽のよろこびつきぬ祀　山蜂

一志ふさぐ晴て静かし除夜の鐘　利合

雜冬

小屏風にさらばを挽うる寒さかな　鈍炭

植行に河風さむし下の端　土芳

井乃干のあてられぬ寒さかな　李下

きさらぎや山伏村乃音淋しく　仙杖

羨ましらをのあけしや古粽　圃仙

大焚より晴は付て嗽す手水　雪芝

山路や猿の尻挽く身向　土谷

俎板に人参の根の寒さかな　治圃

菊刈や冬も日の露の重み　杉風

釈教之部　附追善　哀傷

涅槃

涅槃像あくのなまりも目に見へ　治圃

猫さへも金や皺くも合る殊数の声　芭蕉

山寺や猫守り居る涅槃像　不撤

貧福のまくらをきかも涅槃像　山蜂

灌佛

灌仏やしわ手合する数珠の音　曲翠

若葉や佛うまれて二三日　不玉

灌佛や釈迦と提婆ハ従弟どし　之道

魂祭

負ぐせもしらぬさかしや魂まつり　嵐竹

森(?)の兒のかしこしやうき魂まつり　玄来

家伏や坊主を中に魂まつり　沾圃

甲戌の夏大津に侍しをこのかみのもとより消息せられければ旧里に帰りて盆会をいとなむとて

家はみな杖にしら髪の墓参　芭蕉

悼少年　二句

かなしさや麻木の箸もおとなげなき　惟然

その親をしりぬその子は秋の風　支考

ある人の骸を野口寺に葬りて

首の座を稲妻のするその時か　木節

それなりや稲妻もらす桶の水　支梁

報恩講

袖も柳もおくれゆかりは報恩講　沾圃

臘八

腸をさぐりて見れば納豆汁　許六

何のあれかのあれ迄も大師講　如行

開帳

洛東の真如堂にて善光寺の如来

閑居の附

涼しくも野山にみつる念仏かな　去来

みるまにも二むさしかけし花　智月

かし畑やちり茗荷中よりて佛出世　乙州

とのゝふる川越田や富士まうで　千里

くちすさひに紙の名涼し夜念佛　野坡

食堂に雀啼なり夕しぐれ　支考

旅之部

送別

元禄七年の夏ばせを翁の別を見送りて

麦ぬかに餅屋の店の別かな　荷兮

別るゝや柳給参し坂の上　惟然

許六が木曾路におもむく時

旅人の心にも似よ椎の花　芭蕉

留別

洛の惟然が宅より去来が許へ移る時

氣にかゝるも草の芽をとかしけり　丈艸

鮎の子の白魚送る別かな　芭蕉

甲斐のこの娘に泊る時

宗祇の山路にかゝりて

年よりて牛にのりたる花見哉　杏花

猿の鳴やうき世をとめる姨捨山　越人

みへもせぬつれや蝉や旅の宿　野径

加賀の國におもむく時こゝろのなき人さるそ

ろ此なき八巡地なりけりし小夜嵐　公羽

十団子も小粒になりぬ秋の風　許六

大名に逢ふも稀なる寒さ哉　仝

旅行吟

かすみも峯や雲の旅

はるかに見ゆる比叡かな　[illegible]

峠のゆきも晴にしけり旅姿　我峯

蔦かつらけふ秋あらし馬　丈郎

田園の心さしも深し伊勢の空にいつる　之人

文虎乃扇ひらけき秋涼し　呂丸

我簾団いとし丸腰のさてを花　治国

常陸の出所しあふひくりのやうにくもる

てかるゝ我かくもしにこの秋ハさるべき

ありとてや舟をこぐまれハ一夜別れ

乃わの下にかりねりして

椽に寝る情や梅に蚤の蝶　支考

踊り風や踊子ふる小柳かし　仝

元禄三年の秋粟津の艸菴より

武江におもむくとて膳所の秋塚を

[illegible]

ろ家にいとまごひて

宿かりて名をなのらするしぐれ哉